四葉の息子は劣等生

十六夜翔

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは魔法科高校の劣等生の世界に転生した前世の記憶があるものの原作知識だけすっぽり抜け落ちた少年の物語。

目次

入学編
Episode零 ―― 1
入学編Ⅰ ―― 7
入学編Ⅱ ―― 14
入学編Ⅲ ―― 23
入学編Ⅳ ―― 31
入学編Ⅴ ―― 40
入学編Ⅵ ―― 47
入学編Ⅶ ―― 57
入学編Ⅷ ―― 64
入学編Ⅸ ―― 73
入学編Ⅹ ―― 87
入学編ⅩⅠ ―― 103
入学編　ⅩⅡ ―― 111
入学編ⅩⅢ ―― 122
入学編　幕間 ―― 142
九校戦編
九校戦編Ⅰ ―― 152
九校戦編：Ⅱ ―― 169
九校戦編：Ⅲ ―― 183

入学編

Ｅｐｉｓｏｄｅ零

「今日は珍しく早めに仕事が終わったし帰って録り溜めたアニメを見てしまおう」
　1人の青年は足取り軽やかに帰路についていた。横断歩道を歩いている途中、運命の悪戯か警察に追われていた1台の車が青年を撥ねる。ただそれだけで終わればよかったのだが追い討ちの如く逃走車を追いかけていたパトカーにとどめを刺されてしまった
「(あぁ、こんなことになるのならもっと沢山アニメ見とくんだった)」
　その青年は死んだ悔しさよりアニメが見れない悔しさの方が強かった。目の前が暗くなった
「見せることはできんが連れて行ってやることはできるぞ?」
　唐突に現れた声に驚き目を開くとそこには一面に広がる青い空、ましてや少し星が見えるのはもしかして宇宙か?そんなことはどうでもいいや、とりあえず声のした方に視線を向けるとそこには白い髪と白い髭を生やし白い布を纏った謎のジジイがいた
「あの、すみません誰ですか?」

俺は唐突にその髭に質問する
「なんじゃこの姿を見てまだ分からぬか、儂は神じゃよ」
え、何言ってんのこの髭じじい
「その目、お主信じておらぬな」
俺は立ち上がり人差し指を天に向けた
「お婆ちゃんが言っていた。自分のことを神と名乗るやつにろくな奴はいないって」
「さて、話の続きなんじゃが…」
あからさまにスルーしていきやがるこの神様(髭じじい)
「それでのぉ、お主死ぬ直前にアニメを見たいと言っとったろ?」
「え!なに、見せてくれんの!?」
「スマンがそれは出来ん」
「なんだよ、使えねぇ神様だな」
「その代わり連れて行ってやることはできるぞ!」
「…は?」
連れて行ってやる?どういうことだ?
言っている意味が分からず間抜けな声を出す
「簡単な話、転生というやつじゃ」

「マジ？」
「マジマジ、ついでに言うと転生先は魔法科高校の劣等生の世界じゃ」
　エリカチャンカワイイヤッター…っといかんいかん。魔法科高校の劣等生か…さすおにで有名なラノベじゃないか、アニメも面白かったよな。次回作出してくださいお願いします
「なんじゃ、お主エリカ派の人間か。儂は渡辺摩利が好きじゃのお」
「いや、知らねぇし聞いてねぇし、それに摩利さん彼氏いんじゃん」
「なんじゃＮＴＲに興味無いのか？」
「興味ないね」
「いや、お主仮面ライダーやらＦＦやらネタ詰めすぎじゃ」
「え？やめて欲しい？」
「話が進まなかろう」
「だが断る!!!」
「ジョジョネタではないか！」
「いいから、さっさと転生させろ。それにあるんだろ？転生特典ってやつ。さっさとよこせよあくしろよ」
「黙って聞いておれば、結構不敬なやつよの」

「だって未だに目の前にいる髭じじいが神様とか信じれないし」
「ええい、もうよい！さっさと転生してしまえ」
髭じじい(神様)が投げやりになっていいのかよ
「ってかおい！まだ転生特典とか考えてねぇぞ！」
「儂がとっくに考えておる。安心せい、向こうではあの作品の主人公と同等の強さはあるぞ。保証する」
「それで死んだらお前のせいにするからな」
「分かった分かった。それじゃあ、魔法科高校の劣等生の世界にレッツゴー!!!」
神は振り向き指をさした。扉でも現れるのかと思ったら、足元から何やら見たことある土管が現れた。その瞬間俺はその土管に吸い込まれ落ちていく感覚に囚われた
「自称神の土管じゃねえかあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」
俺は転生した

◇◇◇

魔法、それが伝説や御伽噺の産物では無く現実のものとなってもうすぐ一世紀が経と

うとしていた。

２０９２年８月１１日に行われた沖縄海戦が終結して二年がたったある日、１人の少年が仲のいい兄妹の元へ訪れた。

「初めまして、司波達也様、司波深雪様。司波深夜様が亡くなられたと聞き、四葉家現当主四葉真夜様の命に依り本日から戸籍上お二人の兄妹としてお世話になります。四葉零司改め司波零司でございます。」

妹の司波深雪は呆気に取られ、兄である司波達也は多少警戒心を放っていた。

達也「叔母上の命という事は四葉家の監視ということですか？」

兄は到底十代とは思えないほど落ち着いている。

「いえ、母上…いや御当主様は監視の必要はない、あくまで兄弟として仲良く暮らしてくれと仰られました。そのため私めには本家へのご報告はありません。」

母上と発した瞬間妹の深雪は現実に意識を戻し言葉を返した。

「母上ってことはまさか貴方、叔母様の…」

「はい、息子にございます。私はこれから達也様の弟、深雪様の兄として暮らしてくれと母上から頼まれました。」

零司とは反対のソファに腰掛けてた兄妹は顔を見合わせ相槌を打った瞬間兄妹は視

線を零司に戻し深雪は笑顔に達也は苦笑い気味に声を揃えてこう言った。

「「これから宜しく」」

これから始まるのは仲のいい三人兄弟の高校生としての物語である。

入学編Ⅰ

国立魔法大学付属第一高校入学式当日、それは人にとって新たな出会いの日である。

「やっぱり納得できません！」

校門を入ってしばらくした所で1人の少女と男子が口論していた。その後ろでは1人の男子が目を閉じ腕を組んだ状態でその口論に聞き入ってた。

「如何してお兄様方が補欠なのですか!!入試の成績は二人とも同率でトップだったではありませんか！」

「まだ言ってるのか…」

この口論はもう既に家で何回も行われてた出来事だった。それを零司は俯いたまま親が子に向けるような微笑みでその口論を聞いていた。この微笑みに気づいたのは達也1人だけだった。

「何度だって言います！お兄様方が補欠なのはおかしいです！」

深雪は自分よりも兄達の方が優れていると思っている。熱くなった深雪を止めるのは達也でも容易ではない。

「新入生総代は、お兄様がするべきなのです！ですよね、零司兄さん？」

零司の頬が一瞬引き攣ったがそれに気づいたのはやはり達也だけだった。
「……ノーコメント」
「あのな深雪、ここは魔法科高校、ペーパーテストの成績より魔法技能が優先されるのは当然だ。俺の技能からすれば補欠でも下の方から数えた方が早いだろうからな。」
「そんなこと言って！お兄様に勉学や体術で互角に渡り合える人間など零司兄さんぐらいです！」
本当は達也に勝てる人間なんていないと言いたいところを零司がいるからそんなことを言えないのだろうと思い、吹き出しそうな所を達也の視線に気づきいつものポーカーフェイスに戻した。
「本当なら魔法だって……」
「深雪！」
ハッとした感じで深雪は零司の方へ視線を向けると彼は首を横に振っていた。それに気がついた深雪は口を手で押さて少し俯いてしまった。
「あのな深雪、これは言っても仕方ないことなんだ。お前にだってわかっているだろ？」
「申し訳ありません……お兄様。」
「謝る必要はない。お前はいつも俺の代わりに怒ってくれる。それだけで俺は救われてるんだ」

「嘘です……」

　さっきまで喧嘩してた2人が急に甘い空気を漂わせる。この雰囲気に耐えられる猛者はこの光景を見慣れている俺ぐらいだろうな。

「お兄様達はいつも私を叱ってばかりです……深雪は駄目な妹です。」

「嘘じゃないって。それにお前が俺達のことを考えてくれてるように、俺達もお前のことを思ってるんだよ。」

「そんな……想っているだなんて……」

「？」

「思っている」を「想っている」と深雪は誤変換しているのだろうと思った零司はそろそろ我慢の限界になり吹き出してしまいそうになる

「深雪」

「はい」

「例えお前が答辞を辞退したとしても、俺が代わりに選ばれる事は無い。そんな事をすればお前の評価が下がるだけだ。賢いお前なら分かるだろ？」

「それにな深雪、俺達は楽しみなんだ。可愛い妹の晴れ姿をこの駄目兄貴達に見せてくれないか？」

「お兄様達は『駄目兄貴』ではありません！　深雪の自慢のお兄様です！ですがお兄様達

がそこまで言うのであれば分かりました。深雪の姿しっかり見ていてくださいね！」
「あぁ、見させてもらうよ。さぁ行っておいで。」
「深雪、頑張れよ。」
　達也が校内に行くように促し零司が応援する
「はい！」
　それが嬉しかったのか深雪は満面の笑みで答える
　笑顔で校内に入っていく深雪の後ろ姿を兄である2人は見守っていた。
　新入生総代のお供を終え、2人はこの後入学式まで如何やって時間を潰すかを考えた。
「これからどうする？」
「そうだな…1度家に帰るんじゃ時間が勿体ないし、それならどこかいいベンチでも見つけて読書をしようじゃないか、最悪話し相手はいるんだし。」
「それもそうだね。それに兄さんの話はいつ聞いても飽きないし！」
　そういい2人は歩き始めた。歩き始めて数分でベンチを見つけ2人で腰掛け達也は端末を零司は書籍を開いた。
「紙媒体の書籍とはまた珍しいものを見つけたな…何処にあったんだ？」
　今のご時世、紙で作られた本はどんどん減っていき今はスクリーン型の書籍サイトで

読書する人が増えて行った。
「この前偶然見つけたアンティークショップで見つけたんだ。このめくる感覚がなかなか面白くてね…」
　そんな他愛のない話を兄弟で仲良くしてると後ろから2人の女子生徒が通りすぎて行った。
「ねぇあの子、ウィードじゃない？」
「こんなに早く……補欠が張り切っちゃって」
「所詮スペアなのにね」
「でもちょっとカッコイイかも…」
　達也達のすぐ傍を通った女子たちの口から発せられた言葉、「雑草（ウィード）」、学園側は禁止用語としているが、生徒の間では普通に使われている言葉だ。
　一科生を花冠（ブルーム）、二科生を雑草（ウィード）、一科生のブレザーには左胸と肩に八枚花弁のエンブレムがある事から、自分たちを花冠と呼ぶようになり、それが無い二科生の事を雑草と揶揄するようになったのだ。
　そんな会話を無視し読書に没頭していると、開会式の３０分前だった。
「講堂が開く時間だそろそろ行くぞ」
「了解」

覇気のない返事をしてベンチから立ち講堂に向かう途中、目の前に小柄な女子生徒が現れた。
「新入生ですね？開場の時間ですよ。」
「（女子生徒…一科生の先輩か？）」
「兄さん左手…」
相手の左手に視線を移し気づかれない程度のボリュームで会話する。
「あれは術式補助演算機（CAD）だ…確か学園でＣＡＤの常時携行が認められてるのは生徒会の役員と限られた生徒のみ……彼女はそれなりの地位を持っているのだろう」
「あっ、申し送れました。私は一高の生徒会長を務めています、七草真由美（さえぐさまゆみ）って言います。「ななくさ」と書いて「さえぐさ」って読みます。よろしくね。」
「（数字つき（ナンバーズ）……しかも「七草」か）」
「（七草かぁ…うちの母さんと七草のご当主は仲悪いんだよなぁ…）」
遺伝的な素質に左右される魔法師の能力、そしてこの国において魔法に優れた血を持つ家は、慣例的に苗字に数字を含むのだ。
「俺は……いえ、自分は司波達也です。」
「その弟の司波零司です。」
「そう、君たちが…」

真由美が小悪魔的な微笑みを浮かべさらに話しかけようとすると彼女よりさらに小柄な女子生徒（？）が駆け寄ってきた。
「会長～！式が始まりますよ～！」
「自分たちはこれで失礼します。」
「えっ!?あ、ちょっと！」
「さようなら」
達也は足早に真由美から距離を取り講堂へ向かい、零司は苦笑い気味で真由美に手を振り達也の後ろを追いかけて行った。
「ほえ?もしかしてお邪魔しちゃいました?」
なんとも間抜けな声を出す
～ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編Ⅱ

生徒会長と話しこんでいた所為で、達也が講堂に入った時には既に半分の席は埋まっていた。

特に座席の指定は無いのだから、最前列だろうが最後列だろうが、端だろうが真ん中だろうが自由に座れるのだが、達也は座っている生徒を見てため息を吐きたくなった。

前半分が一科生（ブルーム）で後ろ半分が二科生（ウィード）に分かれているのだ。同じ新入生でありながら前と後ろで綺麗に分かれているのを見て、関心と呆れを感じたのだ。

「（もっとも差別意識が強いのは、差別を受けている側である…か）」

「くだらないね…」

「まぁそう言ってやるな…ほら、一番後ろの端っこ、空いてる、そこに座ろう」

達也と零司は腰を掛け入学式が始まるのを待っていた。

「（あと２０分か…何をするにも中途半端な時間だ）」

そんなことを考えてる達也を横に零司はまた本を読み始めた。

「こういう時に便利だなそれ」

「帰ったら兄さんに１冊貸そうか？ハマったなら俺の部屋に来るといいよ」

「そうさせてもらう」

零司の本好きに苦笑いを浮かべ開会式が始まるのを待っていると、

「あの、お隣空いていますか?」

読書に夢中になってた零司は急に声をかけられてビックリしたがその後何事も無かったかのように返答する。

「どうぞ…（眼鏡…か、伊達メガネではなさそうだし、気になるな…）」

話しかけてきた女子はお辞儀をして椅子に座ったその隣に友達なのだろうか赤髪の女の子が腰をかけた。しばらく読書に集中していると隣からやけに視線を感じ始めた。

「あの…あまり視線を向けられると読書に集中出来ないんですけど…」

「あ、ごめんなさい！今どき紙媒体で読書をする人なんて滅多に見なくて…あの本当にごめんなさい！」

「そんなに謝らないでください。今どき本を持ってる人なんて珍しいのは俺も自覚してますから…

」

慌てふためく弟を横目に兄はとても微笑ましい光景だと微笑んだのだがわかる人はせいぜい零司ぐらいである。

「あの私、柴田美月って言います。よろしくお願いします。」
「司波達也です。此方こそよろしく。」
「俺は司波零司。よろしく柴田さん。」
「私は千葉エリカ。エリカでいいわ、よろしくね、司波君。」
「「よろしく…」」
「あ、そっか二人とも司波君だったねどうしよっか？」
「俺のことは達也でいい」
「俺のことは零司でいいよ」
「よろしくお願いします。達也さん、零司さん」

自己紹介が終わると同時にタイミングよく入学式の開会式が始まった。新入生総代の挨拶では深雪が壇上に上がり挨拶をした。「平等に」とか「魔法以外でも」など結構ギリギリのワードを出していたが、一科生の生徒は深雪の美貌に目を奪われ言葉の意味すら理解しようとしてはいなかった

◇◇◇

入学式を終えて、達也たちはＩＤカードを受け取る為に窓口へと向かった。受け取ると言っても、予め個人別のカードが作成されている訳では無く、個人認証を行ってその場で学内用カードにデータを書き込む仕組みなので、何処の窓口でも作る事が可能なの

だが、やはり此処でも一科生と二科生とで綺麗に分かれている。
「ねぇ、達也君と零司君は何組だったの？」
「俺はE組だ。」
「俺もE組」
「私もEです！よかった、クラスで一人ぼっちになることは無さそうです。」
「なんかすごい偶然よね～私もE組なんだ～」
　今日初めてあった４人がたまたま偶然４人とも同じクラスという奇跡に近い現象…まぁこのメンバーは同じクラスにしとかないと話が続かないし…え？メタいって？気にするな！
「ねぇ、今からホームルーム行ってみない？」
「良いですね」
「せっかくの申し出、有難いんだけど2人で見に行っておいで。」
　エリカの一言を申し訳なさそうに零司は断る
「妹を待ってるんだ」
「妹って新入生総代の司波深雪さんですよね？」
「うっそ！３つ子なの!?」
「よく言われるんだが、３つ子じゃないんだ、俺と弟が双子で４月生まれ、妹が３月生ま

れなんだ」
「へー、双子と年子なんだ」
「本当に偶然と偶然が重なっただけなんだ。」
「それにしても柴田さん、よく分かったね！」
「美月でいいですよ、エリカちゃん。面差しが似ていたんです、お二人のオーラの面差しが似ています。凛とした雰囲気がそっくりです。」
　達也は目を見開き零司と考えてたことと同じことを考えていた。これ以上バレるのを防ぐため達也はあることを言おうとした。
「それにしても……」
「ですが……」
　達也が口を出す前に美月が言葉を付け加えた。
「ですが零司さんのオーラはお二人のとは違ってこう…野性的というか、動物的なオーラを感じます。」
　美月が放った言葉は零司を愕然とさせた。
「オーラの面差しが見えるなんて、〝本当に目が良い〟んだね」
　零司は美月ににっこり微笑みそう告げると美月は顔を青ざめた。
「（美月の前でなるべく力を使わないようにしよう、兄さんもこのことには気づいてるは

ずだ）」

零司と達也はお互いにアイコンタクトを取り美月の前で力を使わないようにしようと決意したのだ。

◇◇◇

美月との間に気まずい雰囲気が漂っていたがある少女の登場で雰囲気が大きく変わった

「お兄様方、お待たせしました。」

とても嬉しそうな声で話しかけてくる少女がやって来た。達也達は振り返らなくとも誰の声か分かるし、エリカと美月も先の話で達也が誰を待ってるのか知ってたので、やっと来たんだと言う感じで声の主を確認した。その後すぐ零司は達也の背中に隠れ気配を殺したことに疑問を持ったが深雪の方に視線を戻した時に零司が気配を殺す理由がわかった。

「また会いましたね、司波達也さん、司波零司さん」

「はぁ…どうも」

「バレてたんですか…どうも」

達也の背中からひょこっと顔を出し挨拶をする。静かに暮らしたい零司と達也は生徒会長という肩書きを持つ人とはあまり関わりたくないのだ。

　達也が真由美の事を観察してるのも気になっていたが、深雪はそれ以上に気になっている事があった……達也の傍に居る2人の女子である。
「お兄様、そちらの方たちは？」
「紹介するよ、俺達のクラスメイトで柴田美月さんと、千葉エリカさんだ」
「そうですか、クラスメイトですか……それでお兄様方、早速クラスメイトとデートしていた理由をお聞かせ願いますでしょうか？」
「デートって……」
　達也の後ろで隠れてた零司が思いっきりため息を吐き達也の背中から現れた
「お前を待ってる間、話し相手になってくれてただけだ、そんな言い方は2人に失礼だろ？」
「申し訳ありませんでした。」
　零司の言い分を理解しものすごい勢いで頭を下げた。この時零司は、「俺の言うことも自分が間違ってたと気が付けば物わかりがいい子なのになんでいつもこうなんだろうな」と心の中で思い頭を悩ませた。
「別に良いですよ」
「そうそう、勘違いは誰にでもあるって」
　深雪の謝罪に対して寛容な態度でそれを受け入れる2人。

「柴田美月です、始めまして」
「あたし千葉エリカ、貴女の事は深雪って呼んで良いかしら？」
「ええもちろん。苗字だとお兄様達と区別がつかなくなってしまいますからね。私も貴女の事をエリカって呼んでも良いかしら？」
「もちろん！　深雪って結構気さくなのね」
「そう言うエリカは見た目通りなのね」
「私も深雪さんって呼んでも良いですか？」
「もちろんよ美月」
　一気に和やかムードに様変わりしたのに気づき零司が提案する。
「なぁ～深雪も来たことだし帰ろうぜ～」
「まぁ待て。深雪、生徒会の方達との話はもういいのか？まだなら何処かでテキトーに時間を潰してるが……」
「その必要はいりませんよ。今回はご挨拶だけで十分ですし、他に用事があるのならそちらを優先してもらっても構いませんから」
「会長!?…ですが会長、此方も重要な要件だったのでは！」
　1人の男子生徒が食ってかかる
「予め約束してた訳ではありませんし、彼女の予定を優先するのは当然だと思いますよ」

「それは…」
「それでは深雪さん、また後日改めて。司波君と弟君も今度ゆっくりと話しましょうね」
「「はぁ……」」
　真由美に対してしっかりとお辞儀をした深雪と、何故ゆっくりと話したがるのか理解に苦しんでいた達也を見て、クスッと笑いながら真由美は達也たちとは逆の方向に歩き出した。その真由美に付き従うように、先ほどの男子生徒も歩を進めたが、少し歩いた後に此方を振り返り、達也と零司をキッと睨みつけてきた。
　また面倒な事になったなと、達也と零司は内心辟易としていたのだが、深雪に悟られまいと鉄壁のポーカーフェイスで隠したのだった。
～ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編Ⅲ

　エリカと美月と別れ、達也達はキャビネットと呼ばれる移動機関を使い家に帰った。平均的な一般家庭と比べるとそれなりに大きい家に、兄妹3人で生活しているのだ。
「お兄様、何かお飲み物でもご用意しましょうか？」
「そうだね、じゃあコーヒーを頼む。だけど、深雪が着替えてからで構わないからね」
「分かりました。零司兄さんは、どうしますか？」
「俺もコーヒーでいいよ」
「分かりました。少々お待ちください。」
　キチンとお辞儀をしてから達也の前から移動する深雪を見て、達也は妹の教育を間違えたかも知れないと思った。思っただけで口にしないのは、ほんの少ししか思って無かったからなのだが。そんなことを思いながら部屋で着替えを終えリビングのソファに腰かける
「ねぇ兄さん…」
「どうした零司？」
「深雪はいつになったら俺のことはお兄様って呼んでくれるのかな？」

「そのうち呼んでくれるようになるさ、気長に待つんだな」
その気長が何時になるのか想像しただけでため息を吐きそうになるのを我慢した。
「お待たせしました」
「あ、あぁ……大丈夫だ、それほど待ってないから」
「ありがとう、深雪」
零司は深雪に感謝と同時に微笑むと顔を赤らめ頬に手を当て視線を逸らした。
「そんな、滅相もありません！私、夕飯の準備してきますね！」
そういいキッチンにパタパタと掛けて行った。それと同時にリビングに電話がかかってきた。
「俺が出よう」
達也が席をたち受話器のｃａｌｌのスイッチを押すとテレビ電話のような形になる
「はい」
「達也殿、零司殿、先日はお疲れ様でした。」
零司はテレビに写った白髪の紳士姿の男性に心当たりがあった。
「葉山さんですか、何か厄介事ですか？」
「いえ、そうではありません」
「では？」

「真夜さまが御二方にお話があると」
「叔母上が……ですか？」
「母上からですか……」
　零司の母親で達也の叔母に当たる四葉家現当主四葉真夜、つまり四葉家本家からの電話である
「代わりますので、少々お待ちを」
　葉山から真夜に通信相手が代わった
「もしもし、達也さん零司さん？」
「叔母上？普段と口調が違うようですが……青木さんでも近くにいるんですか？」
「別に私は達也さんのことも零司さんのこともなんとも思ってないんだからね」
「はぁ？」
　急に訳の分からない事を言われ、思わず呆れた達也。何をしようとしてるのかなんとなく察し、この光景に笑顔の零司。その反応に真夜は満足したように何時もの口調に戻した。
「どうだったたっくん？渾身の演技は？」
「なんだったんですか？」
「ツンデレったのよ」

「何に影響されたんですか……」
「れいくんはどうだった？」
「ツンデレの母上も愛らしくとても可愛かったのですが、私はいつもの母上の方が好きですよ」
「だ、ダメよれいくん私と貴方は母子なんですもの…そんな、好きだなんて…」
「？」
　零司は真夜の言葉を理解出来ず首を傾げる
「そ、それよりたっくん、れいくん、入学おめでとー！」
　そうこの世界の四葉家現当主四葉真夜は息子の零司と甥っ子の達也にひどく溺愛しているのだ
「はぁ……ありがとうございます」
「ありがとうございます、母上」
「それにしても、たっくんだけでなくれいくんのこと迄馬鹿にした連中は抹殺してやろうかしら」
「何処からそんな情報を……」
「ひ・み・つ♡」
「別に放っておいても問題無いですよ」

「でも、たっくん達が無能みたいに扱われるのは面白くないよ」
「上辺だけで人間の価値を決めるヤツらの評価など、気にするだけ無駄ですから」
「やば、超絶カッコいい！」
「叔母上？」
「今すぐたっくんの傍に行って抱きつきたくなるぐらいカッコいい！」
「……」
　真夜の溺愛っぷりに達也は頭を抱えそうになる。それを見た零司が達也をフォローする。
「母上、兄さんが困ってますから、それに兄さんはそうそう母上の元に行ける立場ではないのはご存知のはずですよね？」
「そうだけどさ～」
「今度俺が本家にお伺いするので俺で我慢してください」
「本当！れいくんが来てくれるなら私も少しだけ我慢するわ！」
「ええ、約束しますから今日はとりあえずこの辺で」
「そうね、お祝いの言葉も言えたしれいくんが家に来てくれるって約束してくれたし私は満足だわ。またね、れいくん！たっくん！」
　ｃａｌｌが切れいつもの明かりを戻したリビングで達也は腰を下ろし息を吐いた

「お疲れ様、兄さん」
「あぁ…それにしても叔母上の扱いに慣れてるな零司」
「まぁ１０年以上あの人の傍にいたからね」
　達也はまた大きく息を吐きいつもの夕食を3人で食べ一息した後、３人は各々の部屋でベッドに入るのであった
～達也ｓｉｄｅ～
　翌朝、達也がリビングに来ると、既に深雪が起きていた。普段は零司と共に向かうで、達也は意外感を覚えた。
「今日は早いんだな」
「先生に入学の挨拶をしてませんでしたし」
「それじゃあ深雪も参加するかい？」
「いえ……私ではもうお兄様方の鍛錬についていけませんから」
「別に俺の朝練に深雪が付き合う必要は無いのだが、そう言うことなら分かった。師匠も喜ぶよ、きっと……喜びすぎて箍が外れなければ良いのだが」
「その時はお兄様が守ってくださいね？」
　深雪のお茶目な顔に、達也の表情も明るくなる。互いに昨日の電話の事には触れずに、深雪はローラーブレードで、達也は走って目的地まで向かう。

「そう言えば零司はどうした？」
「零司兄さんなら珍しくぐっすりお眠りになられてたので起こすのもどうかと思いまして…」
「あいつなら1日休んだところで問題にはなるまい」
「そうですね」
坂道を滑り上がる深雪と、一歩一歩駆け上がる達也。どちらが大変かは一概に言えないが、どちらも魔法制御を怠れば大惨事になるのは明白なのだ。
時速６０ｋｍにも届かんばかりのスピードで走り抜ける2人は、いくら人通りの少ない早朝とは言え目立つのだった。
「速っ!?」
「あれって魔法か？」
このように注目されながら、達也と深雪は目的地に向かった。そして自宅から１０分の距離にある（あのスピードで移動してだが）目的の寺に到着するのだった。
～達也ｓｉｄｅｏｕｔ～
「あれ……兄さん？深雪？あぁ…師匠の所か…くぁ～…コーヒー入れてこよ」
達也と深雪が目的の寺に向かって数分後に目を覚ましソファで寛いでいた。しばら

くすると2人が帰ってきた。
「2人ともおかえり～コーヒーは用意してあるから入れてくるといいよ」
「零司兄さんがコーヒーを入れてるなんて珍しいですね」
「今日寺に来なかったのも珍しいな、師匠も珍しいって言ってたぞ？」
　達也と零司の師匠は九重寺の坊主で古式魔法の使い手、「忍び」の継承者、九重八雲である
「う～ん、昨日あの後なかなか寝付けなくて自分のＣＡＤ調整してたら遅くなっちゃって」
「学校に遅刻したわけじゃないんだ問題は無いだろう」
　達也はシャワーを浴び時間まで零司の入れたコーヒーで一息した後3人は学校に向かった。
～ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編Ⅳ

深雪と別れた2人は自分のクラスである1―Eに向かった

「兄さん、確か二科生は教師がいなくて授業内容の課題が出されるだけなんだったよね？」

「確かそのはずだ」

そんな会話をしながら教室に入ると真っ先にエリカが声をかけてきた

「達也くん、零司くん、おはよー！」

「おはようエリカ」

「おはよーエリカ」

零司は笑顔でエリカに手を振りながら挨拶を返す。そして達也が席に座ると左に美月が座ってて、達也の右に零司が座る

「おはようございます。達也さん、零司さん」

「「おはよう美月」」

美月に挨拶をしそのまま達也と零司はキーボードに手をかける

「2人とも何してるの？」

「受講登録を済ませておこうと思ってね」
　「左に同じ」
「スゲーな」
「ん？」
「おっとすまねぇ、今どきキーボードオンリーなんて珍しいからな」
「そうか？慣れればこっちの方が楽なんだ」
「朝から珍しいってワードがよく飛び交うよ…」
「そうなのか？おっと自己紹介がまだだったな、西城レオンハルトだ、レオって呼んでくれ」
「司波達也だ、俺のことは達也でいい」
「弟の司波零司です、零司でいいよ」
「オッケー、達也に零司だな！よろしく！」
　その後エリカとレオがいがみ合ったり、小野遥と言うカウンセラーの教師がきたり、工房見学をしたりと色々あってようやく昼休み、食堂で5人仲良く食事を取っている所に深雪が現れた
「お兄様！」
「誰？」

「妹だ」
「はい、エリカご一緒してもいいかしら?」
「ここ空いてるからいいわよ」
エリカが深雪を隣に座るように促そうとした瞬間深雪を取り囲んだ男子生徒のひとりが口を挟んだ
「司波さん…ウィードと相席なんてやめるべきだ」
「そうだよ司波さん、ウィードとのケジメはしっかりしないと」
「んだと?」
一科生と二科生が一触即発の展開になりかけたその時達也が立ち上がった
「深雪、俺はもう食べ終わったから先に行ってるぞ」
「兄さん、俺はもう少しここでゆっくりしてくよ」
「そうか」
「あ、おい達也!」
「達也くん!」
零司を残して4人は食堂を去っていった
「おい、お前は行かないのか?」
「聞こえなかったのか?俺はここでもう少しゆっくりすると言ったんだ、座りたければ

勝手に座れ」
　ほんの少しだけ殺気を混ぜて男子生徒に言う
「では失礼して、光井さん、北山さん一緒に食べましょう?」
　そういい深雪は零司の隣に座り、光井、北山と名乗る一科生の女子生徒が前に座る
「ちっ!おい行くぞ!」
「おい待てよ」
「(たったこれだけの殺気で怖気付くとは…一科生も大したことないんだな…正直ガッカリだ)」
　深雪に群がってた一科生の集団は立ち去り深雪とその友達であるかと思われる女子生徒2人と食事をとる事になった
◇◇◇
　深雪が連れてきた(勝手についてきた)一科生の連中を退け4人で食事を取りつつ会話をしていた
「あの!私、光井ほのかって言います!ほのかって呼んでください」
「北山雫、雫でいいよ」
「司波零司だ、よろしく。俺のことは零司でいい」
「ビックリしました!森崎君を言い負かすなんて!」

零司「森崎ってあのクイックドローで有名な森崎一門のか？おいおいマジかよ、信じられねぇ」
森崎家のクイックドローは有名だったため零司は自分が食ってかかった男子生徒が森崎だと知り酷く落胆したそのことを知る由もないほのかと雫は首を傾げ、深雪は楽しそうに笑ってた
「その有名な森崎家の人間に殺気だけで退けるなんて、さすがです零司兄さん…いえ、零司兄様！」
「言うて五パーセントしか出てない…ってあれ、深雪？今俺のことをお兄様って…」
「はい！流石です零司お兄様！」
達也に気長に待てと言われていつまで待つのだろうと思ってたら零司は案外早く呼んでくれた。その後昼食を終え午後の見学を終えた
放課後の校門でもまたあの森崎ともめていた。
「いい加減にしてください！深雪さんはお兄さんと帰ると言ってるじゃないですか！」
普段大人しそうに見える美月が最も熱くなっていた
「大体、貴方達に深雪さんとお兄さんを引き裂く権利があるんですか！」
「ちょっと美月……そんな、引き裂くだなんて」
「深雪……何故お前が焦る？」

「別に焦ってなどいませんよ？」
「そして何故疑問形？」
　達也と深雪が会話している間も言い争いはどんどんヒートアップして行くかと思われたが
「なぁーもいいんじゃね？そんなヤツら放っておいてさっさと帰ろうぜ～」
「お前…昼休みの時の！」
「美月、お疲れ様…変わるよ」
「でも…」
「いいからいいから」
　美月にエリカ達の方へ行くように促し森崎の目の前へ立つ
「同じ新入生じゃないか、今の段階でどれだけお前らと俺達に差があるって言うんだ？」
「そんなに見たいなら見せてやる！才能の差ってやつをな！」
　そういい森崎は懐から拳銃型のＣＡＤを取り出して額に付けた
「零司お兄様！」
「深雪！あいつなら大丈夫だ」
　森崎は銃口を零司の額に付けて直ぐに引き金を引こうとしたが引けなかった
「（何故だ…何故引き金を引けない）」

「おいどうした…さっさと引けよ」
「い、言われなくても今すぐ引いてやる！」
「おい、手が震えてるぞ？引かないのか？引けないんだよな」
　零司の放つ殺気は近くにいる森崎だけでなく達也以外の人間ですら怯えているこの状況をどうにかしようとほのかは無意識に自分のＣＡＤを辺り閃光魔法を発動しようとするが魔法が発動する前に霧散した。
「止めなさい！自衛目的以外での魔法攻撃は校則違反以前に犯罪です！」
　聞き覚えのある声に零司は放ってた殺気を消し声のした方向へ視線を向けた。
「風紀委員長の渡辺摩利だ。事情を聞きます、全員着いてきなさい」
「すみません、悪ふざけが過ぎました。」
「悪ふざけ？」
「ええ、森崎一門のクイックドローは有名ですので、後学の為に見せてもらおうと思ったのですが、どうやら引き金を引く勇気が無かったようで」
「ならそこの女子が攻撃性の魔法を放とうとしていたのはどういう事だ。」
「あれはただの閃光魔法ですよ。威力も充分抑えられてたから失明の危険もありませんでした。」
「ほう、君はいい目をしているんだな」

「実技は苦手ですが、分析は得意です。」
「誤魔化すのも得意なんだな」
「誤魔化すなんて…」
「もういいじゃない、摩利！」
　摩利と達也の会話に真由美が割ってはいる
「ねぇ達也君、本当にただの見学だったんだよね？」
「生徒同士で教え合うことが禁止されているわけではありませんが、魔法の行使には起動するだけでも細かな制限があります。この事は一学期内で授業で教わる内容です。魔法の発動を伴う自習活動は、それまで控えた方がいいでしょうね」
　真由美の言葉を聞いて隣にいる摩利が形式的な言葉を述べた。
「……会長がこう仰られることであるし、今回は不問にします。以後このようなことの無いように」
「君、名前は？」
「1―E司波達也です」
「君は？」
「ん？俺ですか？」
「そう、君だ」

「同じくI―E司波零司です」
「そうか、覚えておこう」
そういい真由美と摩利は立ち去って行ったその後森崎が達也と零司に認めないぞ宣言をし逃げるように立ち去りほのかと雫が達也と仲良くなりエリカの緊張の糸が切れたかのようにその場にヘロヘロと座り込んでしまった。
「おいエリカ、大丈夫か?」
零司は座り込んでしまったエリカに手を差し伸べ立たせてあげた
「ありがとう零司君、零司君のものすごい殺気にちょっと当てられちゃっただけ、もう大丈夫だから…手、離してくれる?」
「す、すまん!怖い思いさせてしまったな。何かお詫びしよう」
その後下校中、エリカに自分のＣＡＤの調整を頼まれ、少し特殊なＣＡＤだったが断りに断り切れず零司はその願いを聞き入れるのであった

～Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編Ⅴ

一科生と二科生の衝突があった翌日3人はいつものように学校に向かっていた
「達也く～ん！」
「兄さん！俺用事思い出したから先行くね！」
「あ、おい！」
真由美の声を聞き達也と深雪を置いて先に行ってしまった
「あれ？さっきまで零司君がいなかった？」
「会長の声を聞いてそそくさと逃げていきましたよ」
「逃げなくてもいいのに…あ、そうそう達也くん！」
真由美と達也が会話している間逃げてきた零司はエリカと出会っていた
「おはよう零司君！そんなに急いでどうしたの？」
「悪魔から逃げてきた」
「？」
「悪魔は悪魔でも小悪魔の方だがな」
「あぁ～…」

何かを察したエリカは零司と共に登校し教室に入った。午前中の授業が終わり昼休みに入った、エリカたちと仲良く食事しようと思ってたら零司は何故か達也と深雪に引っ張られ生徒会室前にいる
「ねぇ、兄さん？深雪はともかくなんで俺が生徒会室に呼ばれるの？」
「俺も知らん」
そんな会話を気にすることなく深雪は生徒会室の扉をノックした
「1年、司波深雪と司波達也、司波零司です」
「どうぞ」
扉のロックが開き部屋に入ると七草真由美生徒会長を含む4人の女子生徒が既に座ってた
「さ、座って座って」
真由美に促され深雪を挟んで達也と零司が座る
「入学式で知ってると思うけどとりあえず自己紹介ね。私の隣が会計の市原鈴音、通称リンちゃん！」
「私のことをリンちゃんと呼ぶのは会長だけですよ」
「その隣が風紀委員長の渡辺摩利」
「よろしく」

「で、最後に書記の中条あずさ、通称あーちゃん！」
「会長！下級生の前であーちゃんは止めてください！私にも上級生としての立場というものがあるんです！」
「以上が今期の生徒会のメンバーよ」
「私は違うがな」
「とりあえず食事にしましょう！あーちゃん、自動配膳機の操作よろしくね」
「あ、俺達これがあるんで」
　そういい零司は3人分の弁当箱を取り出した
「まぁ！零司お兄様の手作り弁当ではありませんか！」
「どういう風の吹き回しだ？」
「朝いつもより早く起きてね、久しぶりに朝食作ろうと思ったんだが思ったより熱が入ってしまってしぶしぶ朝食は諦めて昼食にしたんだ」
「それは零司君が作ったのかい？」
「そういう渡辺先輩も手作りですか？」
「そうだが…意外か？」
「いえ、その手を見れば一目瞭然ですので」
「そ、そうか…」

摩利は少し恥ずかしそうに食事を取った。零司の弁当からつまみ食いした先輩からは高い評価を貰った。食事を終え一息取っていると摩利が仲のいい兄と妹のことに触れた

「それにしても、君たちは偶に兄妹とは思えない行動をしたりするよな」

「そうですね、血の繋がりが無かったら、恋人にしたいとは考えたことがありますね」

達也の言葉に先輩は顔を真っ赤に染め、零司はその光景にあからさまに呆れた

「もちろん冗談ですよ？　」

「「えぇ!?」」

「……深雪、何故お前まで驚く」

達也と零司以外が声を上げて驚きその光景に零司は微笑んでた

「零司君はあまり驚かないんだな…」

「ええ、よく家で見せつけられてますから。それに俺はからかわれるのよりからかう方が好きですから…」

「あまりそれは好ましくない趣味だな…」

「そうですか？そう…ですよね」

とても意味深に微笑みながら呟きコーヒーカップのそこに残った珈琲を眺めていた
「そろそろ本題に入りませんか？」
零司の珈琲を眺める姿に見蕩れてたのかそうではないかは置いておいて、零司の一言で先輩達は司波兄妹に生徒会室に呼んだ理由を話し始めた。
「えっと、我々生徒会は、司波深雪さんに生徒会に入って貰いたいと思っています。如何でしょうか？」
主席入学者が生徒会に入るのは、もはや恒例になっているのだと説明があり、その後で勧誘をしてきた真由美に、深雪は躊躇いがちに答えた。
「会長は、兄達の入試の成績をご存知ですよね？　優秀なものを生徒会に入れるのなら、兄達を入れる事は出来ないのでしょうか？」
深雪の発言に、鈴音が否を示した。気持ち的な問題では無く、規則で二科生は生徒会役員にはなれないのだと。
「ちょっといいか？確か風紀委員の生徒会選任枠がまだ決まってなかったよな？」
「摩利、それはまだ査定中って言ってじゃない」
「風紀委員に一科生縛りは無いはずだが…」
摩利の言いたいことを理解した真由美は勢いよく席を立ち摩利に指をさし叫ぶ
「そうよ、その手があったわ！我々生徒会は司波達也君を風紀委員に任命します！」

「はぁ!?」
　達也は珍しく間の抜けた声を出した
「ちょっといいですか?」
「ん?なにかな?」
「深雪は新入生総代であるため生徒会に任命される。それはわかります。兄さんは生徒会推薦枠で風紀委員に入る。半ば強引ですがまぁ分かります。」
「何が言いたいんだ?」
「ここで質問、何故俺はここに呼ばれたのですか?」
　零司は摩利に冷たい視線を向けると摩利は視線を逸らし話を続ける
「実はな、教職員推薦枠で選ばれてた森崎が昨日のことで問題になってな。その事で森崎の教職員推薦枠が撤回されたんだ。それで空いた教職員推薦枠を風紀委員長である私に一任すると言ったので、昨日森崎と対峙してた君にしようと思ったんだが…」
「そうですか、聞きたいことは色々ありますが…時間も時間です。放課後にまた来ます。」
「そ、そうしてちょうだい…」
「失礼します」
「おい、零司」

「零司お兄様！」
　一足先に生徒会室を出た零司を追いかける形で達也と深雪が生徒会室を出る。午後は実習室でいつものメンバーで授業を受けていた
「ところでよ～なんで生徒会室なんかに呼ばれたんだ？」
「風紀委員に推薦されたんだ」
「達也君が風紀委員に？ピッタリじゃん！あ、次零司君の番だよ」
「でもよ～ならなんで零司まで生徒会室に行く必要があったんだ？」
「実は零司もなんだ」
「ほんと、迷惑な話だよ…な！」
　メキャ!!
　零司は据え置き型のＣＡＤに想子を送るために力を込めた瞬間嫌な音が聞こえる
「あ、やべ」
「嘘でしょ…ちょっとやそっとの力じゃ壊れない据え置き型のＣＡＤを片手で…」
「はぁ…」
　その光景に達也は頭を抱え深くため息を吐いた。

～Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編Ⅵ

実習が終わり放課後…3人のうち2人の足取りが重いそんな兄達を他所に深雪は嬉しそうに生徒会室の扉をノックする

「失礼します」

「どうぞ～」

入ると昼休みの時にはいなかった男子生徒が1人立っていた

「初めまして、司波深雪さん。生徒会へようこそ」

「さ、深雪さん。よろしくお願いしますね」

「さて、零司君、達也君、私たちも行こうか」

「待ってください！渡辺委員長！」

「ん？どうした？服部刑部少丞範蔵副会長？」

「フルネームで呼ばないでください！」

「服部半蔵副会長」

「服部刑部です！」

「刑部って…それは君の家の官職じゃないか」

「今どき官職なんてありませんよ！学校には服部刑部と記入…今はそんな話をしてるんじゃなくて！」
　摩利と服部の小さなコントは終わり達也と零司を服部が睨みつける
「私はそこのウィード２人の風紀委員入りを反対します」
「私の前で禁止用語を使うなんていい度胸だ」
「お兄様だけでなく零司お兄様までもを侮辱…許しません」
「深雪！」
「身内贔屓に目を曇らせてはいけません。魔法師は常に冷静を心掛けるものです」
「私は目を曇らせてはいません！　お兄様の評価が芳しくないのは、評価方法がお兄様のお力にあっていないからです！　それに、本来のお力を――」
「深雪!!」
　荒れ狂った深雪を達也が沈める
「服部先輩、俺と模擬戦しませんか？」
「思い上がるなよ、補欠の分際で！」
「『魔法師は常に冷静を心がける』ですよね？」
「別に風紀委員になりたい訳では無いのですが、妹の目が曇ってない事を証明する為には仕方ないですね」

「良いだろう、叩き潰してやる！」
「あの、ちょっといいですか？」
「なんだ！」
　達也と服部の決闘の申し込みに零司が口を挟む
「正直どうでもいいって言うか、深雪の目が曇ってないかどうか証明するのは兄さんがしてくれるようだし、そもそもここに来たのは風紀委員の任命をお断りしようと来ただけですから。それじゃあ言いたいことは言えたし俺はこれで」
「ちょ！ちょちょ、ちょっと待ってくれ零司君！」
　部屋を出ようとした零司を慌てて摩利が止める
「なんですか？」
「なら私と模擬戦をしよう、な？これなら達也くんと零司の２人の力試しができるつまり一石二鳥だ！どうかな？」
「はぁ…その四字熟語があっているかどうかは置いておいて、いいですよ先輩が俺に勝てたら風紀委員に入ってあげますよ」
「貴様！下級生、しかも補欠の分際でなんだその態度は！」
「まぁまぁ、いいじゃないか服部、私が勝てば問題ないんだから」
「渡辺委員長がそう言うのでしたら…」

「それじゃあ三十分後に第三演習室での模擬戦を開始します。双方にＣＡＤの使用を生徒会長として認めます」
そうして達也と零司はＣＡＤを取りに行くために生徒会室から出たのであった

達也と零司は深雪を連れて職員室からＣＡＤを返してもらい第３演習場に向かっていた
「全く、深雪は俺達のことになると熱くなるんだから」
「申し訳ありません、ところで零司お兄様は今回はどちらのＣＡＤをお使いになるんですか？」
「どっちも使わないよ、深雪知ってるだろ？俺のＣＡＤはそう言うのには向かないって」
零司は両手に持ってるＣＡＤの入ったケースを交互に見る
「深雪、このバカ兄貴達にエールをおくれ」
「はい！頑張ってくださいお二人共！」
「よーし、可愛い妹からの応援も貰ったことだし頑張っちゃうぞ～！」
「やれやれ、強情なやつだ」

微笑みながら第３演習場に入る
「それではこれより、二年Ｂ組服部刑部と一年Ｅ組司波達也による模擬戦を開始する。フライングや反則をした場合、私が全力で止めるので覚悟するように」
摩利がルール説明をしている間も、服部は自分がすべき事を頭の中で反芻していた。開始直後にスピード重視の単純な起動式の展開を完了させ、基礎単一系移動魔法を発動。達也を十ｍ後方に吹き飛ばし壁にぶつけて衝撃で戦闘不能にするイメージを何度も何度も確認する。
「双方、準備は良いな？」
摩利に確認され、服部も達也も小さく頷く。服部が腕輪型の汎用型ＣＡＤに手をやり、達也が拳銃型の特化型ＣＡＤを床に向けたのを確認して、摩利が合図をする。
「始め！」
この合図と共に、服部は頭の中で描いていた行動を実行する。が服部は自身の身体が大きく揺さぶられた感覚になり前かがみに倒れる
「しょ、勝者…司波達也！」
チラリと達也に目を向けられ、摩利が慌てて判定をした。その勝ち名乗りを受けた達也は、興味無さそうに一礼してＣＡＤを片付ける為にトランクの場所まで移動する。
「ちょっと待て」

「何か？」
「今のは自己加速魔法を予め掛けていたのか？」
「いえ、身体的な技術ですよ」
「私も証言します。あれは兄の身体的な技術です。お兄様は九重八雲先生の弟子なんですよ」
「忍術使い、九重八雲か！　身体技能のみで魔法並の動き…さすが古流……」
「まぁ、師匠にも弟にも勝てませんがね」
「それじゃあはんぞー君を倒した魔法も忍術ですか？」
「いえ、あれはただのサイオン波です」
「でもそれじゃあ、あのはんぞー君が倒れてる理由が分からないのだけど」
　達也が言ったように、達也が使った魔法は単一系統の振動魔法だ。だがそれだけの説明では納得が行かないようで、真由美は次々と質問を達也にぶつける。その中で鈴音が自分の中で結論が出たかのように口を開いた。
「波の合成ですね」
「リンちゃん？」
　自分の推論を淡々と披露しながらも、鈴音は次の疑問が頭に浮かんでいたのだが、その事は今は気にしてないようだ。

鈴音の言った言葉の意味が分からず、首を傾げる真由美とは違い、達也は苦笑い気味に笑いながら頷いた。

「さすが市原先輩、お見事です」

「ですが、あれだけの短時間で三回の振動魔法の発動…その処理速度で実技評価が低いのはおかしいですね……」

達也の処理速度は一科生としてのラインを十分クリアしてるのに、何故達也が二科生なのかと首を傾げる鈴音だったが、ひょっこりと現れたあずさのおかげでこの疑問は解決した。

「あの～、これってひょっとしてシルバーホーンじゃないですか？」

「シルバーホーン？　シルバーってループキャストを開発したあのシルバー？」

真由美の疑問に、あずさが嬉々として話し始めた。デバイスオタクと揶揄されているらしいのだが、これなら言われても仕方ないなと達也は内心でため息を吐いた。

「でもおかしいですね、ループキャストは全く同じの魔法を連続発動する為のシステム、波の合成に必要な振動数の異なる複数の波動は作れないはず……もし振動数を変数化しておけば可能ですが、座標・強度・魔法の持続時間に加えて四つも変数化するなんて……まさかその全てを実行してたのですか!?」

鈴音の独り言のようなこのセリフは、演習室に居た全員が息をのむような内容だっ

た。だが聞かれた達也だけは苦笑いのような笑みを浮かべながら淡々と答えた。
「学校では評価されない項目ですからね」
「なるほど、司波さんの言っていた事はこう言う事か……」
　達也が答えたのと同時に、倒れていた服部が起き上がった。
「大丈夫ですか、はんぞー君？」
「大丈夫です！」
「さてと、次は俺の番かな？」
「そ、そうだな。対戦形式は先程と同じでいいか？」
「その事なんですが、変更をお願いしますか？」
「変更？」
「ええ、俺のＣＡＤは少し特殊でして」
「零司お兄様、さすがにあれを少しと言うのは無理がありますよ」
「見せてもらってもいいですか!?」
　あずさが『特殊』と言うワードが気になり前のめりで見せてくれと懇願する
「ええ、構いませんよ」
　そういいＣＡＤの入ったケースを開けると深雪と達也以外は驚愕する
「な、なんですかこれは？」

「うそ、ＣＡＤに詳しいあーちゃんが知らないの？」
「手袋…いや、爪型のＣＡＤか？」
「確かにこれを少しと言うには特殊すぎる」
　各々色んな意見を述べ
「ええ、知らないのも無理はありません。トーラスシルバーとは少々縁がありまして設計図を送ってオーダーメイドで作ってもらったものですから」
「シルバー様のオーダーメイド!?という事はシルバー様にお会いになられたんですか!?どんな人でしたか？」
「な、中条先輩。とりあえずその話はまた今度にしましょう。とりあえず今は模擬戦を…」
「そうでした、ごめんなさい」
　中条は今の状況を思い出し謝った
「と言う事なので」
「わかった、変更内容を聞こうか」
　それを聞くと零司はネクタイを外しブレザーとシャツを脱ぐ
「ちょ！零司君!?」
「安心してください。ちゃんとインナーを着てますから。まぁ簡単な話、渡辺先輩の攻

撃を全て避けます。このインナーに少しでも傷が着けば先輩の勝ちです。」
「些か不公平では無いか？」
「これぐらいしないといい勝負にならないでしょ？」
摩利「いいだろう」
真由美「なら審判は私がやりましょう。ルールを再確認します。制限時間は３０分。それまでに渡辺摩利が攻撃を司波零司の身体に傷を与えられれば渡辺摩利の勝利。それでいいですか？」
摩利「問題ない！」
零司「さぁ…始めようか！」
真由美が双方に確認を取る
真由美「では…はじめ！」

～Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編Ⅶ

摩利と零司の模擬戦が始まって数分未だに攻撃は零司に当たってない

「(何故だ、何故当たらない！くそ、なら全方位の攻撃で！) フッ！」
「(全方位の攻撃…数は多いが規則性は無し、避けられるな)」
「くっそーなんで当たんないのよ～！」
「ふーむ、一校の三巨頭もこんなもんか」

摩利の攻撃を尽く避ける零司

「ならこれで！」
「(数よりスピードに切りかえたか、確かにそっちの方が勝てる確率は高いがそんなスピードで当たるほど俺は甘く……なっ！)」

摩利の攻撃を回避しようと考えた瞬間身体が麻痺したように動かなくなった

「私の勝ちだ、零司君！」
「（匂いによる神経麻痺！）ふっ…お見事です、先輩…」

摩利の斬撃系の魔法は零司の腹部から肩にかけてのインナーを切り裂き大きく後ろに吹き飛ばされ大の字で横たわる

「勝者、渡辺摩利！」

七草会長の合図により試合が終わり渡辺委員長の勝利が決まった

「す、すまない！少し強めに当てすぎた」
「問題ないですよ」
「でも血が出てるじゃないか！」

零司の右肩から直線に血が流れてる

「気にしないでください」

そう言い、裂けたインナーの上から制服を着る

「さて、行きましょうか渡辺委員長」

「そ、そうだなでは達也君、零司君、風紀委員室に行こうか。」

生徒会室に戻ってから内部直通の階段を下って、達也と摩利は風紀委員本部にやって来た。そして達也は、その部屋の汚さに頭を抱えた。

「まぁ、少しちらかってるが楽にしてくれ」

「……委員長、この部屋片付けてもいいですか?」

「別に構わないが」

「さすがに見てられませんね」

よほど意外だったのか、達也達の申し出に摩利は素で驚いていた。達也と零司は魔工技師志望としてＣＡＤが乱雑に扱われてるのが我慢出来ないと理由を言って、摩利の答えを待つ事無く片付けを始めた。

「魔工技師って、あれだけの対人戦闘スキルがあるのに……」
「如何足掻いても上位のランクは取れませんからね」
「よし、終わり」

風紀委員室の片付けが終わると2人の男子生徒が入ってきた

「はよーっす。あ、姐さん帰ってたんですね」
「おはようございます、委員長。本日の巡回終了しました。逮捕者いません」

風紀委員の先輩が巡回報告をしにやってきた時、スパコンといい音が聞こえてきた
「姐さんは止せと言ってるだろうが、鋼太郎！　お前の頭は飾りなのか！」
「何回もポンポンと叩かねぇでくださいよ姐……委員長」

そんなやり取りを終えるとさっきまで頭を叩かれてた男が視線を向ける

「ところでそいつらは新入りですかい？紋無しのようだが」
「辰巳先輩！　その表現は禁止用語に抵触する恐れがあります！　この場合は二科生と

言うべきかと」
「お前ら、そんなんじゃ足元をすくわれるぞ?ここだけの話、さっき足元をすくわれたばかりだ。かく言う私も零司君との模擬戦で奥の手を出さなきゃ手も足も出なかったからな」
「あの服部と渡辺委員長が…それは逸材ですね」

その言葉に達也と零司は少し驚いた顔をする

「風紀委員は一科生である事の優越感に浸ってるばかりのヤツじゃないんだ。アタシがこう言った性格だからね。真由美も十文字もそう言った意識の少ないヤツを推薦してくれる。まぁ、教職員枠のヤツはそうは行かなかったがね。だから君にとっても此処は居心地が良いはずだよ」
「3年の辰巳鋼太郎だ」
「2年の沢木碧だ、よろしく」
「1年司波達也です。」
「同じく1年司波零司です。こちらこそよろしくお願いします。先輩」

その日の帰り道……

「全く…優しいな、お前」
「兄さん、どうしたの？急に」

唐突な兄さんの言葉に戸惑った

「何、お前と渡辺委員長の模擬戦を見てそう思っただけさ」
「あれのどこに優しい要素があったのさ、ボロ負けだよ？ボロ負け」
「お前、ペンダントの調子が悪いだろ？」

ギクウゥゥ!!

「いつから気がついてたの？」
「午後の授業。イライラしてるってだけで据え置き型のＣＡＤが壊れるわけないだろ？」

兄さんに見抜かれてた、さすが兄さん勝てる気がしないよ

「ペンダントの調子が悪いから渡辺委員長の模擬戦をあんな感じにしたんだろ？無駄に力加減を間違えて渡辺委員長を傷つけないように」
「そこまで考えてないよ、それにあれは俺が戦う気がなかっただけさ」
「やっぱりお前は優しいよ。ま、そういうことにしとくさ。帰ったら調整しといておこう」
「ありがとう兄さん」

あれ？今日はやけに深雪が大人しいぞ？なんでだ？

～ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編Ⅷ

風紀委員のゴタゴタがひと段落し、家に帰るといつも通りに3人で夕食を取る。その後達也はＣＡＤの調整装置がある地下に行く。その後で深雪が自分のＣＡＤを調整してもらおうと地下に歩いていく。数分後地下から大きな物音がする

「(これは深雪のお仕置きかな?となると今日は渡辺委員長の事で鼻の下伸ばしたとか勘違いしてんだろうなぁ)」

そんなことを考えながら紅茶を啜る。翌日はいつも通り達也と零司は九重八雲の所へ向かい深雪は家で朝食を作る。帰ってきたらシャワーを浴び朝食を取り家を出て学校へ向かう。達也と零司は、今日から一週間あるクラブ勧誘合戦の関係で風紀委員室に来ていた。

「さて諸君、今年もあの馬鹿騒ぎの季節がやってきた!今年も幸い補充が間に合った。紹介しよう、立て!」

達也と零司はその場で立つ

「1年の司波達也と司波零司だ」

「使えるんすか?」

「腕前は確認済みだ。お前らが束になってかかっても膝をつかせることすら無理だろう。他に質問のあるやつは?」

摩利の一言で周りは静かになった

「質問がないなら出動!」

「「了解!」」

巡回に出る前に、摩利から腕章と薄型のビデオレコーダーを渡された達也と零司。何か問題に出会ったらこれで録画をするらしいのだが、原則風紀委員の証言は単独で証拠採用されるので無理に録画する必要は無いようだ。

「それでは次は委員会のコードを端末に送る。指示を送る時も、確認の時もこのコードを使うから覚えておけ。それからＣＡＤだが、風紀委員はＣＡＤの学内携行が許可されている。使用に関しても誰かに許可を取る必要は無い。ただし不正使用が発覚した場合は一般生徒よりも重い罰が科せられるから覚悟しておけ。」
「委員長、ＣＡＤは委員会の備品を使ってもよろしいですか？」
「別に構わないが、本当にいいのか？」
「あれはエキスパート仕様の高級品ですよ」
「どうせ今まで埃を被ってたものだ、好きに使って構わないよ」
「ではこの二機をお借りします」
「んじゃ俺も」
「ほんと君たちは面白いな」

　そういい風紀委員室を出て達也と零司は別れて巡回することになった。数分後外を巡回していた零司はクラブの先輩達に囲まれた女子生徒に目を当てた、その女子生徒はエリカだった

「ちょっと！何処触ってるのよ！」

「風紀委員です！その生徒から離れなさい！」

クラブ勧誘の先輩達は手を離し少し後退りをする。その間を走り抜けエリカの手を握る

「逃げるぞ！」

「え、零司君!?」

エリカの手を引き体育館裏まで連れていき息を整える

「ここまで来れば安全だ…ろ…」

服のはだけたエリカを見て少し困惑する

「見るな！」

零司は慌てて後ろを向きエリカが服を整えるのを待つ

「見た？」
「……」
「み・た？」
　後ろを向いてた零司は視線をエリカに戻す
「見えた、すまん」
「バカ！…つぅ～」

　エリカは零司の脛を蹴るが、蹴ったエリカの方が痛がった

「悪いと思うなら付き合いなさいよ」
「あ、おいエリカ」

　エリカに手を引っ張られ闘技場に向かい剣道部の演習を見に来たがエリカはあまり面白くなさそうな顔をしていた

「お気に召さなかったのか？」

「だってさ、台本通りの一本なんてつまらないじゃない」
「いくら真剣勝負だと言っても、仕方ないんじゃないか？本当の真剣勝負なんてただの殺し合いだからな」
「クールなんだね」
「まさか、思い入れの違いだよ」

そんな会話をしていると達也が闘技場にやってきた

「風紀委員の仕事をサボってデートか零司？」
「なっ！ち、違うわよ！」
「？」
「冗談だよ」

そんな会話をしていると演習場の方から竹刀が鳴る音が聞こえた。エリカに引っ張られて最前列まで来た零司と後ろから着いてきた達也は、興味深そうに中心に居る二人を見ているエリカに質問した。

「知ってる人？」
「直接の面識は無いけどね。女子の方は全国女子剣道大会準優勝の壬生紗耶香で、男子の方は桐原武明、関東大会のチャンピオンよ」
「桐原君！剣術部の演習までまだ時間があるんだけど」
「心外だぜ壬生。俺は剣道部のデモに手伝ってやったんだぜ？」
「口で分からないなら剣で分からせてあげるわよ！」
「剣道で剣術に勝てるつもりか？　可哀想だから魔法は使わないでやるよ」
「魔法ありきの剣術で、純粋に剣の道を磨いた私に勝つつもりなの？　自惚れもそこまで良くと滑稽よ」

そういい壬生と桐原は竹刀を向け合い、お互いに撃ち合う

「互角？」
「いや、壬生先輩の勝ちだろう」

その光景を3人で見ていた。

「諦めなさい、桐原君。真剣なら致命傷よ」
「真剣だったら？　そうか壬生、お前は真剣勝負をお望みか」
負けを認めるように壬生が言うと、桐原は不敵に笑い出した。そして腕に巻いてあったＣＡＤを操作して、魔法を発動し壬生が身につけていた防具に傷を付ける。
「如何だ壬生、これが真剣だ！　そしてこれが、剣道と剣術の差だ！」
振動系・近接戦闘用魔法『高周波ブレード』
そして休む間も無く桐原がもう一撃喰らわせる為に振りかぶった。瞬間壬生と桐原の間に達也が入り込んでＣＡＤを使う、そこから嫌な音が聞こえる
「（キャストジャミングを応用した魔法か…流石だな）」
そんなことを考えてる間に達也は桐原を取り押さえる
「此方第二小体育館。逮捕者一名、負傷してますので念の為担架をお願いします」

「何で桐原だけなんだよ！　剣道部の壬生も同罪だろ！」
「魔法の不適正使用の為と言いましたが」
「ねえ、零司君…ちょっとやばくない？」
「はぁ…」
　零司はため息を吐き達也の元へ近づく
「風紀委員のものです、これ以上問題を大きくしてもらっては困ります。先輩方には大人しくして頂けると幸いです」
　言葉は優しいものの殺意を込めて放った言葉は周りを圧倒し第二小体育館での騒動は終わったのだった

～ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編Ⅸ

達也は闘技場での一件を報告する為に部活連本部に呼ばれていた。聞かれた事は始めから仲裁に入らなかった理由と、魔法を使用したのは桐原のみかの二点だった。

「仲裁に入らなかったのは、両者が主張している問題の現場を見てなかったからです。それに、怪我程度で済めば自己責任だと判断したからです」

「なるほど……適切な処置だな。それで、本当に魔法を使ったのは桐原だけなんだな？」

「はい」

「先輩方に大人しくしてもらっていたので大事にはならなかった…と思います。」

「それで、十文字。風紀委員としては桐原を追訴するつもりは無いが、お前は如何だ？」

「俺も風紀委員の処置に従おう。せっかくの温情を無駄にするつもりは無い」

部活連会頭、十文字克人を前に、達也は感嘆の息を吐いた。服の上からでも分かるほど隆起した筋肉と、それ以上に凄まじい威圧感を放っている

「失礼します」
「失礼します」

部活連本部の報告を終え昇降口でいつものメンバーが既に集まっていた。そのまま達也の奢りでお店に行くのであった。

「そう言えば達也、剣術部の相手は殺傷ランクBの『超音波ブレード』を使ったんだろ？超音波酔いを防ぐために耳栓をする術者もいるって聞いたけどよく無事だったよな」
「『高周波ブレード』は有効範囲の狭い魔法だからな。触らなければ如何とでも対処出来るさ。刃に触れられないだけでそれ以外は真剣相手と変わらないからな」
「それって、真剣の対処が簡単って言ってるようなものですよね…」
「単に真剣を相手しただけではないんですよ。お兄様、キャストジャミングをお使いになりましたね？」
「深雪には隠し事ができないな」
「深雪はお兄様のことならなんでもわかりますの」

兄妹とは思えない発言にレオがツッコミを入れる

「それ、兄妹の会話じゃないぜ」
「そうかな（かしら）？」

ツッコミに対して声を揃えて不思議そうな顔を浮かべた兄妹に、ツッコミを入れたレオが崩れ落ちる。

「アンタじゃこの二人には太刀打ち出来ないわよ」
「俺が間違ってたよ」

同情するようにエリカが慰めると、レオも自分が間違ってたと認めた。

「その表現は甚だ不本意だな」
「良いじゃありませんか、お兄様。私とお兄様が強い兄妹愛で結ばれてるのは事実なのですから」

冗談を重ねるように、深雪は達也に擦り寄って肩に頭を乗せる。その行動にレオだけ

では無くエリカまで机に突っ伏した。その光景を零司は楽しそうに眺める

「零司君は驚いたりしないのね」
「慣れてるから…もーらい！」
「あ、ちょっと！」

零司はそんなこと言いながらエリカが食べてるパフェからいちごを取り上げる

「返しなさいよ！」
「いいよ、ふぁい」

エリカが食べてたパフェについてたいちごを口にくわえて不敵な笑みを浮かべる。
その光景にエリカと美月が顔を真っ赤にする

「じょ、上等じゃない！動かないでよね！」
「零司、エリカをからかうのも程々にな」
「はーい、『パクッ』うーん、美味」

エリカはからかわれたことに少しムッとしたがすぐに話題を戻す

「そう言えば深雪、キャスト・ジャミングって言った？　それって確か魔法の妨害電波の事よね？」
「電波じゃねぇけどな」
「ものの例えよ！　でも確か特殊な石が必要なのよね。えっと……アンティ何とか」
「アンティナイトよ、エリカちゃん」

名前が出てこなくてテキトーに誤魔化したエリカを、美月がフォローした。

「そうそれ！　アンティナイト」
「達也さん、アンティナイトを持ってるんですか？　あれってかなり高価なものだったと思うのですが……」

キャスト・ジャミングを使うにはアンティナイトが不可欠、この事は常識だと思っていた美月は、達也がアンティナイトを所持してるものだと思いこんでいた。しかし達也

の答えは常識を覆すものだった。

「いや、持ってないよ。価格以前にあれは軍事物資だからね。一般人が持てるものじゃないさ」

「でも、キャスト・ジャミングを使ったんでしょ？」

今度はエリカの質問に、達也は身を乗り出して答えた。

「これはオフレコで頼みたいんだが、俺が使ったのはキャスト・ジャミングの理論を応用した、特定魔法のジャミングなんだ」

そうして達也が剣術部の桐原に使った魔法についての説明を始めた

達也の魔法による説明会を終えた頃にはもう外は暗くなってた

「さて、そろそろお開きにしようか」
「待って！」
「どうかしたか？エリカ」
「零司君！ふぁい！」

エリカは仕返しとばかりに最後に残してたいちごをくわえ、零司に取るように促す

「エリカ…零司に仕返しはやめた方がいい」
「ん？何か言った、達也君？」

エリカが零司から達也に視線を外すと零司の方に無理やり視線を戻される

「エリカ…動くなよ？」
「れ、零司君!?」

零司は右手でエリカの顔を固定し顔を近づける。零司とエリカの顔がどんどん近づ

く

「ね、ねぇ零司君？ほんの冗談だから、本気？本気じゃないよね？」
「エリカが取ってみろって言ったんだろ？」

お互いの顔が残り数センチまで来たところで達也が止める

「零司、美月の顔が真っ赤だからその辺にしてやれ」
「はーい」

零司はエリカがくわえてたいちごを左手の人差し指で押し込む

「ほんの冗談だよ、ごちそうさま」

そういい左手の人差し指を自分に唇に当てて先に帰って行った。その光景にエリカは放心し美月は顔を真っ赤にしてレオは首を傾げた。それから、クラブ勧誘合戦は大変な1週間だった。乱闘に向かう途中で妨害を受けたり、決闘を申し込まれたりしたが取

りあえず地獄のような1週間は過ぎていった

「達也ー、今日も委員会か？」
「いや、今日は俺も零司も非番だ」
「すぅ…すぅ……」
「零司君、ずっと寝てる」
「今や有名だよな～、魔法も使わずに上級生をなぎ倒す謎の1年風紀委員コンビって」
「なんだよ、その『謎の』ってのは…さてと」
「あれ？達也君何処か行くの？」
「深雪の所だよ、俺は非番でも深雪は生徒会の仕事があるからな。零司が起きたら一緒に帰ってやってくれないか？」
「それは構わないけど」
「そうか、頼む」

そういい達也は教室を出ていった。それから数分後零司が目を覚ます

「う、う～ん…あれ？兄さんは？」

「深雪の所よ、さーて零司君も起きたし私達も帰ろうかな」
「あれ？俺が起きるまで待ってくれてたの？」
「そういうこった、んじゃ帰ろうぜ～」

達也が壬生に部活勧誘されている間その事を知らない零司は3人に食事をご馳走していた。翌日達也と零司と深雪は生徒会室で昼食を取っていた

「ところで達也君、昨日剣道部の壬生をカフェで言葉責めにしてたのと言うのは本当かい？」
「委員長も年頃の淑女なんですから言葉責めなんてはしたない言葉はやめた方がいいですよ」
「ありがとう、私のことを淑女扱いするのは達也君ぐらいだ」
「自分の彼女を淑女扱いしないとは、先輩の彼氏は紳士的ではないのですね」
「そんな事ない！　シュウは……何故何も言わない」
「なにかコメントした方が良かったですか？」

言ってから失言だったと気付いた摩利は、立ち上がりかけた格好で固まった。その隣

では真由美は噴出すのは必死に堪えているのを、摩利は視界の端で捉えていた。
「……それで、君が壬生を言葉責めにしてたと言うのは本当か？」
「そんな事実ありませんよ」

達也は誤解を解く為に昨日紗耶香と話した内容を全員に聞かせるように話した。

「そんな事が……」
「しかしそれは壬生の勘違いだ」

摩利が言うように、風紀委員は完全なる名誉職であり、内申に影響する事も無いのでしがみついてまで就く役職では無い。その事を知っていた達也は、紗耶香が誰かに洗脳されているのを疑っていたのだ。

「そのようなデマを流してるヤツらに心当たりは？」
「ううん、噂の出所なんて探しようが無いでしょ」
「あれば注意してるさ」
「俺が聞いてるのは末端である事無い事吹き込んでるヤツらでは無く、その背後の連中

の事です。恐らくですが、『ブランシュ』が絡んでると思われます」
「どうしてその名を！」
「秘匿情報のはずなのに」
「秘匿情報と言っても噂の出所を全て塞ぐ事は出来ませんよ。こう言った事は隠さずに全て公開した方が良いのですが」
「そう…よね……なのに私たちはこの事から避け…いえ、隠そうとしてる」

達也が言った事を自分でも思っていた真由美は、落ち込んだようにそんな事を言う。

「仕方ないですよ」
「え？」
「此処は国立の施設で、国の方針に縛られるのは仕方ないと思いますよ。会長や市原先輩のお立場では、隠すのは仕方ないでしょう」
「司波君……慰めてくれるの？」
「達也君も隅に置けないな。落ち込んでる女をしっかりと慰めてハートを鷲掴みにするんだから」
「でも、追い込んだのも司波君では？」

あずさの発言に、摩利が便乗するように言葉を続ける。

「自分で追い込んで慰めるか、凄腕ジゴロだな」
「ジゴロ……凄腕の……」
「落ち着け深雪、あれはあの人たちの冗談だ」
「さてと、そろそろ時間ですし、俺は教室に帰ります」
「あぁ待て、最後に一つだけ」
「何です?」

立ち上がった達也に、真由美とじゃれあっていた摩利が静止の声を掛けた。

「壬生の誘いに、君は何て答えたんだ?」
「答えを待ってるのは俺の方ですよ」
「答えを聞いて、君はどうする?」
「俺は自分が出来ることをするだけです」

達也の答えを、満足そうに頷き、未だにじゃれ付いてきている真由美を宥めに入った。そんな姿を見て、達也は呆れたように生徒会室から出て行った。そんな達也に深雪は黙ってつき従ったのだった。

～Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編X

その日の夜、3人は夕食を取りリビングのソファで寛いでいた。

「お兄様、お聞きしたいことがあります。」
「なんだい？」
「お昼に生徒会室でお話されてた……」
「あぁ。あれは深雪にも教えておくべきだったね。キャビネット名『ブランシュ』オープン」

達也の音声認識でリビングに反魔法国際政治団体の情報が集められたものが映し出された。そして、達也は深雪にブランシュについての説明を始めた。その会話を零司は目を瞑り一言も話さなかった。次の日は実技の授業で美月がエキサイトしてた。放課後は達也は壬生の答えを聞きにカフェに行った。

「ねぇねぇ、零司君。噂で聞いたんだけど壬生先輩と達也君って付き合ってるの？」

「デマだよ、詳しくは言えないけど壬生先輩が兄さんに剣道部に入らないかって言われたらしいよ」
「な～んだ、つまんな～い」
「とりあえず帰ろうか」
「そうだな、このままいてもなんにもなんねぇし」

翌日いつもの様に授業を受ける平穏な日々は直ぐに崩れ去った

『全校生徒の皆さん！僕達は学内の差別撤廃を目指す有志同盟です！僕達は生徒会と部活連に対し、対等な立場における交渉を要求します！』

「零司」
「俺のところも来たよ、行こうか」
「行ってらっしゃい」

途中で深雪ど合流し、放送室に向かうと既に克人と摩利と鈴音が居た。

「遅くなりました」
「遅いぞ」
「すんません」

形だけの叱責に形だけの謝罪を返し、達也は状況確認をする事にした。
とりあえず放送は止まっている。恐らくは電源をカットしたからだろう。放送室の扉は閉ざされており、突入した形跡は無い。如何やら占領した連中は、鍵をマスターキーごと持っていったらしい。

「明らかに犯罪ですねこれは」
「そうです。だから相手を暴走させない為にも此方は慎重に行くべきでしょう」

零司の独り言を鈴音が拾い、誰かに言い聞かせるような口調で自身の考えを披露する。誰に言っているのかは考えるまでも無く分かった。

「聞く耳を持ってる連中とは思えん。此処は多少強引でも短時間で解決を図るべきだ」

一人頭に血が上っているように思える摩利は、鈴音の意見を却下しスピード解決を主張しているようだ。
「十文字会頭は如何のようにお考えで？」
自分を呼びつけておいてこの場に居ない真由美が気になったが、この場にはもう一人考えを聞くに値する人間が居たのだ。
「俺は交渉に応じても良いと考えてるが、学校施設を破壊してまで早急に解決すべきかは悩みどころだ」
「なるほど」
克人の考えに一礼して下がった達也は、懐から携帯端末を取り出した。決して摩利の刺々しい視線に負けたわけではない。
「壬生先輩ですか？　司波です」
達也の言葉に周りがざわついた。放送室占領の一人である紗耶香に直接電話を掛け

るなど誰も思いつかなかった行動だったし、誰一人中に居る人間のプライベートナンバーを知ってるものは居なかったのだ。

「それで先輩、今どちらに……はぁ、放送室に居るんですか。それはお気の毒に……いえ、馬鹿にしてる訳ではないです」

達也の聞いている紗耶香の声を何とか聞こうと、周りに居る生徒たちは達也の傍に寄って行く。その中には女子も居るので、深雪の機嫌が忽ち悪くなっていくのを感じた達也は、早急に電話を終わらせる事にした。

「それで、本題に入りたいのですが……十文字会頭は交渉に応じても良いと言ってます。生徒会長の意思は……いえ、会長も応じるそうです」

達也が否定しかけたところに鈴音のジェスチャーが視界に入り、この場ではそう言う事にしておいた方が良いと判断した達也は、そう繋げた。

「ええ、先輩の自由は保障しますよ。我々は警察ではないので牢屋に閉じ込めるような権限はありませんので……では」

「おい達也君、今のは壬生紗耶香か？」
「ええ。すぐ出てくるそうです」

摩利の質問に簡潔に答えた達也は、鈴音や克人にも視線を向けた。

「早急に体勢を整えるべきかと」
「体勢？　何の体勢だ？」

何を言ってるんだと言う表情で、摩利は零司に尋ねた。困惑の表情が浮かんでいたのを確認して質問に答える事にした。

「何って、中の連中を取り押さえる体勢ですよ。ＣＡＤは間違い無く持ち込んでるでしょうし、もしかしたら他の武器も持ってるかもしれないんですから」

「……達也君はさっき、自由を保障すると言ってなかったか？」

ポカンと口を開けていた摩利だったが、衝撃よりも疑問が勝った為に発言出来た。鈴

音は口を開けたまま固まっているが、摩利の疑問は鈴音も思っていた事のようで、達也の答えを待っている。

「兄さんが保障したのは、壬生先輩の自由だけですよ。それに兄さんは、学校や風紀委員を代表して交渉してるとは一言も言ってません」

あっさりととんでもない事を言い放った零司を、摩利も、鈴音も、克人までもが口を開けて固まってしまった。ただ一人を除いて固まった達也の言葉を聞いて、深雪は笑いながら達也を責める。

「悪い人ですね、お兄様は」

「今更だな」

「そうですね。ですが、壬生先輩の番号を登録してた件は、後でゆっくりとお聞きしますので」

場違いな怒りをぶつけられ、達也は苦笑いを浮かべた。その光景を零司は声を殺しながら笑った

暫くすると壬生が扉を開けた。その瞬間、壬生以外の実行メンバーを取り押さえた

「どういうことなのこれは！私達を騙したのね!?」

自分だけの自由が保証されていると気付いていなかった壬生は達也に少々ヒステリックな様子で詰め寄る。そこに深みのある声が聞こえた。

「司波はお前を騙してなどいない」

「十文字会頭……」

「交渉には応じよう。だが、お前達の要求を受け入れることと、お前達の取った手段を認める事は別問題だ」

壬生が悔しそうな表情をする中、その発言に待ったをかける者がいた。

「それはその通りなんだけど……」

「七草」

「彼らを離してあげて貰えないかしら」

梓を具して現れた真由美は壬生の元へ歩みを進める。

「だが……！」

「分かっているわ摩利。でも壬生さん一人では交渉の段取りも出来ないでしょう？当校の生徒である以上、逃げられるということも無いのだし」

「私達は逃げたりしません！」

声を荒らげる壬生に真由美は彼女を含めた周りの人間にとある決定を伝える。

「学校側はこの件について、生徒会に委ねるそうです」

「壬生さん、これから貴方達との交渉の打ち合わせをしたいのだけど、着いてきてもらえるかしら」

「ええ、構いません」

放送室をエガリテの数人が占拠した翌日、３人は駅である人物を待っていた。

「あら？　達也君に零司君に深雪さんじゃない、如何かしたの？」

「昨日の一件が如何なったのかきになりまして」

この言葉に真由美は驚いた表情を浮かべた。

「意外ね。達也君がそんな事を気にするなんて。他人に興味の無い人だと思ってたわ」

「概ねその通りですが、如何やら他人事では無くなってるようなので」

エガリテの目的は知らないが、紗耶香の目的は達也を仲間に入れる事だろうと確信している為にわざわざ駅で真由美を待っていたのだ。

真由美の話では、彼らの目的は一科生と二科生の差別の撤廃だそうだが、具体的な意見は何一つ出てこなかったそうだ。

「それで、明日講堂で討論会を開く事にしたの」

「随分と急ですね」

「善は急げってね！　相手の考えを聞くには良い機会だし、単純な論争なら負けないもんね」

「（具体的な意見が何一つ出てないのに討論になるんだろうか）何だか会長、楽しそうで

すね」

零司は最初に思ったことは口にせずに別の言葉を発した

「そうね。もしあの子たちが私を言い負かすだけのしっかりとした根拠を持ってるのなら、これからの学校運営に役立てるじゃない？」

討論会が開かれる事は、あっという間に全校に知れ渡り、改革派は仲間を集める為に必死に勧誘をしていた。

「おい達也」

「レオ、如何かしたのか？」

「いやな、廊下で美月が上級生に話しかけられてるんだが、助けた方が良いのかと思って」

「わかった、行ってみよう」

「頼むわ」

そういい達也は席をたち美月の元へ向かった

「あれ？零司君は行かないの？」
「兄さんだけで大丈夫でしょ、俺が行くと余計にめんどくさくなりそうだし」
「確かにそうかも」

夜になり、３人は八雲の寺を訪れていた。達也と深雪は八雲と会話、どうでもいい零司は八雲の弟子と組手をしている

「それで、何を聞きたいんだい？」
「第一高校三年、剣道部主将司甲の事について」

八雲は真面目に達也に情報を渡した。司甲はブランシュのリーダー、司一の義弟である事と、再婚当時はあまりなじんでなかったが何時の間にか親しい間柄になっていた事など、プライバシーを完全に無視した情報まで八雲は達也に話したのだった。

急遽予定された割に、討論会に出席している生徒は全体の半分と言った所だった。講堂を見渡した鈴音がため息交じりに冗談を言うほどに、この参加率は想像してなかったのだ。

「如何やら皆さんよほど暇なようですね。もう少しカリキュラムを増やすよう進言した方が良いのでしょうか？」

「市原、冗談を言ってる余裕があるのは良いが、あまり洒落に聞こえないぞ」

鈴音の冗談に苦笑いを浮かべながら摩利が応じた。摩利自身もこれほどまでに参加するとは思って無かったのだ。

「お兄様、壬生先輩のお姿が見えませんが」

「別の場所で待機してるのかもな。それとも……」

「達也君？」

急に目を細め遠くを睨んだ達也を、摩利は不思議そうに眺めていた。

「でも確かに、事前に調べ上げたメンバーの半分しか講堂に来てませんね。司波君の思ってる通り、別の場所に控えてるのかもしれません」
「実力行使組か……面白い」
「渡辺委員長、ご自分のお立場をお忘れなき用に」
「……分かってる」

鈴音に釘を刺された摩利は、不貞腐れたように短く答えた。

「此方から打って出るのはマズイよな？」
「専守防衛といえば聞こえは良いですが、向こうが仕掛けてこない以上此方からは仕掛けるのは駄目ですよ」
「始まります」

鈴音の言葉に、摩利も達也も口を閉ざす。真由美が一人で大丈夫と言ったので達也や摩利も舞台袖で見ている。零司に限っては二階席の隅っこで下を見おろすに止まっているが、本音を言えば摩利は壇上に上がりたかったのかもしれない。

「やはり真由美の独壇場だな」
「元々が言いがかりでしか無いですし、改革派メンバーには明確な資料がありませんからね」

真由美が予算配分や施設の使用時間などが明確に分かるグラフや表を使っているのに対し、改革派は何一つ明確な資料は無い。これじゃあ討論にすらならないのだが、真由美はこの際に言いたかった事があったようだ。

「私も今の現状を善しとは思ってません。ご存知のように、生徒会役員は一科生からしか選出する事が出来ず、確かに此処にも差別と言われるものが存在します。ですから私は、私の任期の間にこの差別を撤廃出来る様に務めたいと思ってます」
「ふ～ん……」

真由美の意思表示に対して、摩利は面白く無さそうに口を開いた。如何やら摩利は、真由美が自分に何も相談してくれたなった事が面白くなかったようなのだ。普段はお互いを悪友だと評しているのに、意外と気にしてるんだなと達也は摩利を眺めていながらそんな事を考えていたのだが、大きな爆発と共にそんな陽気な気分はあっという間に

無くなった

～Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編ＸＩ

「何事だ！」
「委員長、如何やら実力行使に出るようですよ」
「何!?」

　達也がそう言った直後、轟音と共に講堂の扉が開いた。明らかに生徒では無い男たちが武装して突撃してきたのだ。

「風紀委員は直ちにマークしていたものを取り押さえろ！」

　部下に指示を出しながら、摩利は進入してきた男共のマスクの中の酸素を奪った。毒ガス対策だったのかは分からないが、マスクの中の空気を奪われた男共はあえ無く酸欠状態に陥り、その場に崩れ去った。
「これで終わりか？」
「いえ、もう一つ来るようです」

窓を見ながら達也は淡々と話す。達也が言った通りに榴弾が投げ込まれ煙を出したが服部の早急な対処により榴弾は煙ごと外に放り出された。その後零司が二階席から飛び降り達也に近づく

「兄さん」

餌を目の前にした犬のように達也に近づく

「落ち着け零司。学校に侵入してきたテロリストは教師や風紀委員、部活連がどうにかしてくれる、お前の出番はもう少し先だ」

達也は零司を落ち着かせ摩利に視線を向ける

「委員長、俺達は爆発のあった実技棟に向かいます。」

「頼む」

達也は零司と深雪を連れ講堂を出る途中でレオとエリカに出会う

「レオ～…っと援軍の到着か」
「ここら辺は敵が少ないが陽動か？」
「彼らの狙いは図書館で閲覧出来る秘匿技術の資料よ」

突如現れたカウンセラーの小野遥が図書館が狙いだと伝える

「後ほどお話を聞かせてもらってもよろしいですか」
「却下します……と言いたいところだけど、そんな雰囲気じゃないわね。その代わりと言う訳では無いけど司波君、カウンセラーとしてお願いがあるのだけれど、壬生さんに機会をあげてほしいのよ！　彼女、剣道の成績と魔法の成績のギャップで悩んでて、それで……」
「兄さん」
「分かってる、行こう」

零司も達也も小野遥の言葉を無視し図書館に向かう、それに付き従うのは深雪だけだった

「おい、零司も達也もそれは冷たくないか？」

「レオ、余計な情けで怪我をするのは自分だけじゃないんだ。」

そう言い放ち走り出した達也と零司の後ろをエリカとレオは追いかける

図書室の近くまで来たが、そこでも既に乱戦が繰り広げられていた。教師陣が何とか食い止めてるように見えるが、しっかりと見れば食い止められてるのは教師陣の方だった。

「達也！　此処は俺に任せろ！」

ＣＡＤを起動し、硬化魔法を展開して殴り合いを始めたレオに、達也は一礼して叫ぶ。

「分かった。レオ、此処は任せるから、絶対に食い止めろよ」

「任せろ！　パンツァァー！」

達也に任されたのが嬉しいのか、レオはさっきよりも気合の入った声で殴り合いをしている。そんなレオを見て、エリカが呆れたような口調でつぶやいた。

「ＣＡＤもだけど、アイツってホントアナクロよね」
「逐次展開か…興味深いな」
「全身を硬化してるんですか?」
「あれなら刺されても問題なさそうだな」

走りながらも余裕の四人は、レオの戦闘に対してそれぞれ感想を言い合った。だがそれは図書室棟に入るまで。入り口を見張っていたテロリストは既に達也が無力化しているため、スムーズに入る事は出来たが、そこからは慎重に進まなければいけないのだ。

「階段下に二人、登り切った所に一人、二階の特別閲覧室に三人…」
「達也君が居ると待ち伏せの意味が無くなっちゃうね…それじゃあ!」

エリカは最近零司に調整してもらった伸縮性の警棒を取り出し待ち伏せているテロ

リストたちに向かって行った。

「何者だ！」

「兄さんと深雪は特別閲覧室に向かって、俺はエリカの援護を」

「わかった、行くぞ深雪」

「はい！」

　そう言った後、達也の身体は壁を跳ね、深雪の身体は宙を舞った。普通ではない方法で階段を登った二人に向かって真剣を持った生徒と鍔迫り合いをしながら感嘆な声をもらした

「さすがね～」

「エリカ、油断しない！」

　エリカと鍔迫り合いをしていた生徒に一瞬で近づき鳩尾に拳を当て気絶させる

「エリカ、怪我はないか？」

「大丈夫だって！」

真剣に傷がついてないか調べる零司をエリカは照れくさそうに振り払う

一方その頃、講堂での騒ぎを鎮圧した摩利は、特殊能力で状況を把握しているであろう悪友に尋ねた。

「真由美、戦況は如何だ？」

「問題無し。達也君と深雪さんがしっかりと敵を制圧していってるわ」

「そうか、ならアタシはこの周りにまだ敵が居ないか見回ってくる」

「それも大丈夫よ。十文字君が先頭にたって辺りを制圧してるから」

真由美が戦況を詳しく把握していた所為で、摩利はする事が無くなってしまったのだった。

「司波兄妹は想像以上の戦果だな」

「お友達も手伝ってくれてるようだけど、やっぱり達也君と深雪さんは規格外の戦闘スキルね」

「零司君は戦闘に加わってはいないのか？」
「図書館の１階で生徒を気絶させただけのようね。」
「そう言えば達也君は零司君に出番はもう少し先と言っていたがどういう意味なんだろうか」
「さぁ？」

まだ各地で戦闘中だと言うのに、学園三大権力者の二人は暢気にそんな事を話しているなどと、最前線に居る達也と深雪は思いもしなかっただろう。

～Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編　XII

兄達が閲覧室に行ってから数分。誰かが階段を降りてきた

「誰……」
「1―Eの千葉エリカで～す」
「1―E司波零司」

彼女が後輩だと言う事は自分の事を先輩と呼ぶところから分かっていたのだが、紗耶香はそれ以上に目の前に立っている後輩達の事が気になっていた。

「（何この子達、全然隙が無い）何の用？　用がないなら退いてちょうだい！」
「あら物騒。まぁこれで正当防衛かな？　そんな言い訳しないけどね」
「エリカ…」
「わかってるって、ちゃんと守るから」

キャスト・ジャミングを使いエリカの魔法を封じた紗耶香は、一撃一撃に必勝の威力を込めて切りかかる。

「もう終わり？　それじゃあ次はアタシの番ね」

同じような動きで紗耶香の攻撃を捌いていたはずのエリカはまったくもって息が上がっていない。それどころか余裕さえ伺えるのだった。

エリカの一撃で持っていた得物を折られた紗耶香は、大人しく負けを認めるつもりだった。だがエリカはそれを許さなかった。

「そこにある得物を拾って、貴女の本気を見せなさい」

「？」

「アンタを縛っているあの女の幻影をアタシが打ち砕いてあげる」

言われた事を理解した紗耶香は、ブレザーを脱ぎ落ちている得物を拾い構えた。

「私には分かる、貴女の技、それは渡辺先輩と同じ」

「アタシのはあの女のとは一味違うわよ」

勝負は一瞬で着いた。互いが交わったと思った次の瞬間には紗耶香の得物は真ん中から折れ、紗耶香はその場に膝をついた。

「ゴメン先輩、骨が折れてるかも」
「ヒビが入ってるわね……凄いのね貴女」
「先輩は誇って良いよ。先輩は『千葉』の娘に本気を出させたんだから」
「剣術の大家…そう、貴女あの千葉の……」
「ちなみに渡辺摩利はウチの門下生。剣術の腕だけならアタシの方が上なんだから」
「そうなの……」

意識を手放してその場に倒れこんだ紗耶香。その後達也と深雪と合流し零司は壬生を担ぎ上げて保健室に連れていく

零司「全く、なんで俺が…」

零司はブツブツ文句を言いながら達也、深雪、レオ、エリカ、十文字、真由美、摩利の９人で壬生が目を覚ますのを待っていた。

壬生は零司以外が囲んだ状態で目を覚ます、零司は入口近くの壁に背もたれ腕を組んでいる。壬生は事の顛末を話し始める。敵の本体がブランシュである事を聞いた真由美と摩利は、予想通りの相手にため息を漏らした。

「入学式の後で見た渡辺先輩の剣技に魅了され、手合わせを申し出たのに素気無く断られた事に付け込まれてしまって……今思えば私が浮かれていたんですよね」
「なんだって！壬生、それは本当か？」
「傷つけた側が覚えて無いのは良くある事ですよ」

エリカの辛辣なツッコミに、摩利の顔が歪む。

「エリカ」
「だって、零司君！」
「批判も批評も全て聞いてからだ」

達也に叱られるように宥められたエリカは、不貞腐れたように黙った。

「それで渡辺先輩、先輩は何て言って壬生先輩の申し出を断ったんですか？」
「確か『私の腕ではお前の相手は務まらない、それよりお前の腕に見合う相手と稽古してくれ』違うか？」
「そんな!?　それじゃあ私はずっと勘違いで逆恨みを……一年無駄にしちゃった……」

泣き出しそうになった紗耶香に、達也が声をかける。

「無駄では無かったと思いますよ。確かに悲しい理由で一年間を過ごしてしまったかもしれません。ですがこの一年間で先輩は必死に努力して大きく成長したのです。エリカが言ってました、二年前とは比べ物にならないほど強くなってると。その努力を否定してしまったら、本当にその一年間は無駄になってしまいますよ」
「司波君、少し良いかな……」

達也の胸に顔を押し当てて、泣き声を殺しながら紗耶香は思いっきり泣いた。さすが

の深雪も今回だけは機嫌を悪くする事なくその光景を見ていたのだった。
思いっきり泣いてスッキリした壬生から離れ達也は会話を切り出す
「さて、問題はブランシュの奴らが今何処にいるのかということですが」
「達也君、まさか彼らと一戦交えるつもりなの？」
「その表現は妥当ではありませんね、叩き潰すんですよ」
「兄さん、じゃあ…」
「ああ、お前の出番だ」
その会話に摩利が言葉を挟む
「危険だ、学生の部を超えている」
「私も反対よ、学外のことは警察に任せるべきだわ」
その言葉に達也は反論する
「そして壬生先輩を強盗未遂で家裁送りにするんですか？」

「成程、警察の介入は好ましくない、だからといってこのまま放置することもできない。だがな司波、相手はテロリストだ…俺も七草も渡辺も当校の生徒に命をかけろとは言えん」
「当然だと思います。最初から委員会や部活連の力を借りるつもりはありません」
「二人で行くつもりか？」
「本来ならそうしたい所なのですが…」
「お供します」
「ダメだ！」
「ですが！」

達也が行くのなら深雪もついて行くのだろうと思ってた皆は零司の拒否に驚いた

「俺が行くということはどういうことか理解してるだろ？」
「分かっております、ですが…」
「俺も兄さんも深雪に危険な事はして欲しくないんだ、だから兄さんが帰って来るのを待ってるんだ、いいね？」
「分かりました。」

零司は深雪の頭を撫で深雪は渋々了承したのだった

「私は行くわよ、零司君」
「俺もだ」
「兄さん…」
「仕方ない」

達也は渋々エリカとレオの同行を承諾した、その会話を聞き壬生は達也に話しかける

「司波君、もしも私のためだったらお願いだからやめて頂戴。私は平気、罰を受けるだけの事をしたんだから…それより私のせいで司波君たちに何かあったら…」
「壬生先輩のためではありません」

壬生の言葉を跳ね返す

「自分の生活空間がテロの標的になったんです。俺と深雪、そして零司の日常を損なお

うとした物は全て駆除します。これは俺にとって最優先事項です。」

達也のその言葉は周りの人たちを静まらせた

「しかしお兄様、どうやってブランシュのアジトを突き止めればいいのでしょうか？」

「分からないことは知っている人に聞けばいい。零司」

「分かってるよ」

そういい零司は扉に触れ開くとそこにはカウンセラーの小野遥がいた

「九重先生秘蔵の弟子であるお二人に隠れ仰せようなんて、やっぱり甘かったか…」

既にアジトの詳細を突き止めていた小野は端末を達也に渡し、壬生と話し始めた。ブランシュのアジトは放棄された工場だった。

「放棄された工場か…車の方がいいだろうな」

「正面突破ですか？」

深雪の出た疑問に答えたのは達也ではなく零司だった

「ブランシュのアジトだ、中の警備は厳重だろう、裏からコソコソ行くよりあえて正面突破で奇襲をかけた方が相手を翻弄できる…だろ？」
「成程…流石です、零司お兄様！」
「頭を使う仕事は俺より兄さんの方が秀でてる。俺なんてまだまださ…」
「車は俺が準備しよう」

十文字のその言葉に真由美は驚いた

「えっ、十文字君も行くの？」
「十師族に名を連ねる者として当然の務めだ。だがそれ以上に俺もまた一校の生徒としてこの事態に看過することは出来ん」
「じゃあ！」
「七草、お前はダメだ」

一緒に行くと言おうとした真由美を克人が止める

「この状況で生徒会長が不在になるのは不味い。」

「了解よ」

案外あっさり諦めた真由美を零司は驚いたが誰一人として気が付かなかった

「だったら摩利、貴女もダメよ。残党がまだ校内に隠れているかもしれないんだから風紀委員長に抜けられたら困るわ」

作戦会議は終了し克人は車の準備を始めた

～ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編ⅩⅢ

十文字から車の準備ができたと連絡が入り達也、零司、エリカ、レオの4人は車に向かった。十文字は既に乗っているのだろう思い達也は後部座席に乗り込もうとすると助手席にいた男性に声をかけられて少し困惑した

「よう、司波兄。俺も参加させてもらうぜ。」

そこに居たのは剣術部の桐原武明だった。最初は何故居るのか分からなかったが十文字が乗せているなら問題は無いだろうと思い、深く考えるのをやめた。車が出て数分車内では…

「司波、お前が考えた作戦だ。お前が指示を出せ。」
「レオ、お前は退路の確保。エリカはそのアシストと逃げ出そうとした奴の始末」
「捕まえなくていいの？」
「余計なリスクを追う必要は無い。安全確実に始末しろ。」

そしてメンバーの振り分けを再開する。

「会頭は桐原先輩と裏口を回ってください。俺と零司はそのまま踏み込みます。」

「わかった、任せておけ」

そして達也を乗せた車はブランシュのアジトに近づいていた。アジトの入口に近づいた時達也がレオに合図を出す

「今だ、レオ！」

「パンツァー！」

音声認識による逐次展開で車を硬化させ、閉ざされた入口を突き破る。そして達也の言われた通りに別れ、達也と零司は中に入っていった。そしてすぐに開けた場所に到着したと思ったら、目の前からライトを当てられた。

「ようこそ！」

彼がブランシュのリーダーだと、達也も零司も即座に理解したのだった。
開けた場所に出た達也と零司を出迎えたのは、十数人の部下を引き連れたリーダーと思しき男だった。

「君が司波達也君か。そしてそちらの男性が弟の零司君かな？」
「お前がブランシュのリーダーか」
「おっと、そうだねまずは自己紹介と行こう。私がブランシュ日本支部のリーダー、司一だ」
「一応投降の勧告だけはしておいてやる。全員武器を捨て両手を頭の後ろで組め」

達也はＣＡＤ、シルバーホーンをブランシュのメンバーに向け投降の勧告をする。が司一はそれを見るや大笑いする

「魔法が絶対的な力だと思っているなら大きな勘違いだよ。」

司一が手を挙げ合図をすると部下達は銃を構える

「司波達也君、我々の仲間になりたまえ。アンティナイトを必要としない君のキャストジャミングは非常に興味深い技術だ。」
「壬生先輩を使って接触したのも、弟に俺を襲わせたのもそれが狙いか。」
「うん、頭のいい子は好ましいね。だがそこまで分かっていてノコノコやってくるとは所詮子供だ。」

そういい司一はおもむろに右手で眼鏡を取り上に投げる

「司波達也！我が同士になるがいい！」

そう叫んだと同時に、眩い光が達也に放たれた。そしてその光が治まると、達也の顔から表情が抜け落ち、突き出していた右手がダランと床に向けられた。

「意識干渉型系統外魔法『邪眼（イビルアイ）』……と称してるが、その正体は催眠効果を持つパターンの光信号を明滅させ相手の網膜に投射する光波振動系魔法。単なる催眠術、これで壬生先輩の記憶もすり替えたのか？」

「子供騙しだな、つまらん」

零司は興味無さそうに欠伸をする

「貴様……何故」

「つまらん奴だな、眼鏡を外す右手に注意を引き付けて、ＣＡＤを操作する左手から目を逸らさせる。そんな小細工が通用すると思うか？起動式が見えていればその一部を抹消するだけでお前のちゃちな魔法などただの光信号だ」

達也に追い詰められた司一は焦り始める

「そんな真似が…貴様の対抗魔法はキャストジャミングでは無かったのか？」

「二人称は君じゃなかったのか？」

そういいシルバーホーンを司一に向ける

「大物ぶっていた化けの皮が剥がれているぞ？」

「撃て、撃て！」

部下達は銃を構え撃とうとすると持っていた銃は分解しバラバラになるその光景に恐怖した司一は奥へ逃げ込む

「兄さん、追いかけるといいよ…で、こいつらは殺していいの？」
「証拠は残すなよ？」
「やったぜ」

そういい達也は司一を追いかける

ｓｉｄｅ零司

「さてと、どうやって殺そうかな？引き裂くか？嫌でも、そうすると血の後片付けがめんどくさいな。…なら燃やすか？よしそうしよう」
そういい零司は爪型のＣＡＤ、シルバークロウを操りテロリストの足元に大きな魔法式を展開する

「なんだこれは！」
「特別に教えてやるよ、振動減速系広域加熱魔法ムスプルヘイム…さぁお前らの悲鳴を聴かせておくれ」

展開した魔法はテロリスト数十人を一人一人包み燃やしていった。数十人による悲鳴は戦闘中の十文字や桐原には聞こえず、外で待機していたレオとエリカにしか聞こえなかった。1番悲鳴が聞こえる位置からは近いが達也はこうなることを予想していた。

「おい、これって悲鳴じゃねぇか？」
「そんなこと分かってるわよ…レオ、あんたここにいなさい。私は中に入って調べてくるから！」
「おい！」

そういいエリカはレオを置き去りにし悲鳴の聞こえる中に入っていった。一方達也は司一を追い詰めていた

ｓｉｄｅ達也

「（司一を含め、テロリストが１１人。これで全員のようだな。マシンガンは十丁、他に遠距離武器は無しか）」

物理的な障害をものともしない達也の魔法の前には、待ち伏せなど意味を成さない。ＣＡＤの引き金を引き、マシンガンを分解して達也は部屋へとゆっくり進んでいく。マシンガンが分解され驚いていたテロリストたちだったが、その次の行動へ移る際にそれほど怯まなかったのは自分たちの優位を確信していた為なのかもしれない。達也の耳には不快な音が響いていたのだった。

「如何だ魔法師。これが本物のキャスト・ジャミングだ！」

「……（大量のアンティナイト、鉱山型古代文明の栄えた地にのみ産出される軍事物資）、パトロンはウクライナ・ベラルーシ再分離独立派。そのスポンサーは大亜連合か。零司に知られなくてよかった。」

達也が心底つまらなそうにつぶやくと、司は一瞬たじろいだがすぐに笑みを浮かべた。

「殺れ！」

キャスト・ジャミングを発動しながら、テロリスト十人は達也にナイフで襲い掛かる。つまらなそうな目のまま達也はテロリストに向けてＣＡＤの引き金を引くと襲いかかってきたテロリストからから血が噴き出す

「ぎゃぁ！」

「グワァ！」

「な、何故だ!?　何故このキャスト・ジャミングの中で魔法が使える!?」

心底つまらないのを隠そうともしない目を向けられ、司は壁にへばりつき震えだす。震えてた一のわきの下辺りから、日本刀のようなものが生えてきた。

「ヒィッ!?」

道を文字通り切り開いてきたのだろう桐原が、この部屋の惨状を眺めて達也に視線を

向けた。

「やるじゃねぇか司波兄、それで…こいつは？」

桐原が達也から視線を一に向け、その視線に司は這いつくばってでも逃げ出そうとしていた。

「ブランシュのリーダー。司一です」

既に興味を失っている達也は、桐原に事実を告げた。

「コイツが？　コイツか！壬生を誑かしやがったのは！」

「ギャアアアアアア!?」

辺りに不快な音が響く。桐原の得意魔法『高周波ブレード』が一に襲い掛かった。ただでさえ模造刀で壁を切り裂いてきたが桐原が、腕一本を斬り落とすのは容易い。司の腕は何の抵抗も無く切り落とされたのだった。

「その辺にしておけ！」

桐原が切り開いてきた道を通ってきた十文字が、司に止めを刺そうとしていた桐原を止める。そして一瞥して興味を失ったのか、克人は一の切り落とされた腕の先を魔法で燃やした。ブランシュリーダーは意識を失った。

「司波、コイツらで全員か？」
「おそらく」
「そうか、では俺の家に電話しよう。後の事は何とかする」
「お願いします」

十氏族の中でも、十文字家の力は警察庁トップにも負けないくらいの影響力を持つ。これで今回の事が外部に漏れる事も無ければ、達也や深雪の事も世間には知られる事は無くなったのだ。

ｓｉｄｅ零司

一方その頃悲鳴の聞こえた場所へ走っていた。悲鳴は桐原が達也と合流する時に消えていた。エリカが開けた場所に到着するとそこに居たのは零司だった。

「零司…君?」
「エリカ?なんでここに?」

エリカが見ていた光景は地面に転がっている黒い物体を零司が踏み砕いてた

「何を…しているの?」
「ダメじゃないか、兄さんの言われた通りにレオと退路を確保していないと…」
「何をしてるのって聞いているのよ!」
「何って…ゴミ掃除だよ、ただのゴミ掃除」

ゴミ掃除と言い黒い物体をどんどん踏み砕き塵になったゴミを燃やし灰も残さず消していた。

「さてと、終わりかな？」
「ねぇ零司君…さっき悲鳴が聞こえたんだけど…君が踏み砕いてた黒い物体は人間じゃないよね？」
　エリカは零司がさっきまで砕いてた黒い物体が人間じゃないことを祈り零司に聞いたが零司は肯定とも否定とも取れない返事を返した。
「さぁ？どうだろうね…」
　エリカに向けられた微笑みはとても不敵に見えた。
「さてと、俺はこれで…兄さんには先に帰ると伝えておいて」
　エリカは恐怖で返事は出来なかった。零司は返事を待たずにブランシュのアジトから出ていった。そして零司は端末を取り出しどこかに電話をかける
「もしもし、俺です。零司です」

『おや、どうかされましたか零司殿？』
「要件は分かってるはずですよね、葉山さん」

零司は四葉家執事の序列1位、葉山に……つまり四葉家本家に電話を掛けていた

『分かっております。ブランシュの件ですな？』
「はい、その件で本家に出向きます。」
『その程度なら電話でもよろしいのでは？』
「いえ、母上にそのうち逢いに行くと言っていたので丁度いい機会です。ではまた」
『承りました。それではこちらは何時でも出迎えるように準備をしております』
「よろしくお願いいたします」

そんな会話をしながら葉山との電話を切った。後日、壬生紗耶香の退院の日、朝早く起きて達也と話をしていた

「壬生先輩の退院には出向かないのか？」
「ごめん、用事で今日1日いないから」

「わかった、深雪には俺から言っておこう」

達也との会話を終え零司は電動二輪に跨り用事という名目で達也達には内緒で四葉家本家に向かった。

ｓｉｄｅ達也

達也達は壬生紗耶香の退院のお祝いに達也と深雪はエリカと病院に向かった。そこには壬生と楽しそうに会話する桐原の姿があった

「桐原先輩、毎日来てたんだって～」
「へぇ～、それはまた」
「ちぇ～、やっぱ驚かすのは無理か～」
「いや、驚いたぞ。桐原先輩がそんなにマメな性格だったとは」
「そっちじゃない！ふんだ、そんなふうに性格悪い事ばかりやってるからさーやにもフラれちゃうのよ！」

深雪はエリカの言った言葉に違和感をだいた

「エリカ、さーやってもしかして壬生先輩の事なの？」

エリカ「そうだよ？」

「随分と仲良くなったんだな」

エリカ「任せて」

エリカは達也に指した指を振りながら答える

達也「壬生先輩」

達也に名前を呼ばれて壬生と桐原は達也に気がついた。壬生の所へ行くと壬生紗耶香の父親である壬生勇三と2人で話すことになった。勇三は達也に感謝し、零司によろしく伝えておいてくれと言われ、達也は壬生達の元へ向かう

「司波君、お父さんと何を話していたの？」

「俺が昔お世話になった人がお父上と親しい友人だったと言う話をしていたんですよ。

本当、世間は狭いですよ」

「達也君とさーやってやっぱり深い縁があるのね～。ねぇさーや、どうして達也君から桐原先輩に、乗り換えたの～？達也君の事好きだったんでしょ～？」

「ちょっと、エリちゃん!?」

からかわれるのに慣れてない壬生は顔を赤らめる

「ルックスだけなら達也君の方が上だと思うんだけどなぁ」

桐原「つくづく失礼な女だなお前…」

エリカは桐原の肩に手を置く

「桐原先輩…男は顔じゃないよ」

「なっ…マジに泣かせたろかこいつ…」

「まぁまぁ、それでさーや決め手はマメな所？不器用な男の優しさにグッときちゃったとか？」

それを聞き壬生は深雪から貰った花束で顔を隠しながら話し始める

「うん…多分エリちゃんの言う通り私、司波君に恋してたんだと思う」

そのセリフにエリカは驚き桐原は驚愕し深雪は顔を顰める

「私の憧れた揺らぐことの無い強さを持っているから…でも、憧れると同時に怖かったんだと思う…私がどんなに一生懸命走っても司波君にはきっと追いつけない…あんなふうに強くはなれない。桐原君は、多分この人なら喧嘩しながらも同じ速さで歩いてくれると思った…だからかな?」

それを聞き桐原は恥ずかしそうに頭を掻く

「ご馳走様。ねぇ桐原先輩はいつからさーやの事好きだったの?」

「うるせぇ女だな、別にいいだろそんなこと。お前には関係ねぇ」

達也は何かに気が付きエリカに話しかける
「そうだぞエリカ、いつからなんて関係ない。大切なのは桐原先輩が本気で壬生先輩に惚れているという事だ」
桐原「なっ!?お前…」
「詳しいことはプライバシーにも関わってくるから言えないが、ブランシュのリーダーを前にした時の桐原先輩の勇姿には男として適わないと思ったなぁ」
「ねぇ達也君～」
「なんだ?」

エリカは達也に近づきあえて桐原に聞こえるように耳打ちする

「後でこっそり教えてね」
「千葉てめぇ!司波坊、喋りやがったら承知しねぇぞ」
「喋りませんよ」
「えぇー、いいじゃない!」
「このアマ!」
「うわぁ～怒った～」

そうして桐原とエリカの追いかけっこが始まった。そして達也と深雪は病院を出て日常に戻るのであった

～Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～

入学編　幕間

朝早く本家に向かった零司は葉山に電話をかけた

「もしもし葉山さん」
『おはようございます、零司殿。』
「おはようございます、葉山さん。昼前にはそちらに到着できるかと」

軽い挨拶を終え零司は葉山に到着時間を知らせる

「承りました。それではお待ちしております。」
「よろしくお願いします。」

そう言い休憩していた零司は葉山との電話を切り、再度電動二輪に跨り本家に向かった

一方エリカは桐原にヘッドロックをされておどけていた。達也と深雪がいなくなっ

たことを確認し桐原と壬生に話しかける

「桐原先輩、さーや…ちょっといいかな?」

「お、おう」

急に雰囲気を変えたエリカを離し話し始めるを待つ

「どうしたの、エリちゃん?」

「桐原先輩、さーや…少し付き合ってくれない?」

「??」

壬生と桐原は詳しいことは何も聞かずにエリカについて行くことになった。エリカ達が移動している間、零司は四葉家本家に到着していた

「お待ちしておりました。零司殿」

「葉山さん、お久しぶりです」

出迎えたのは葉山だった

「零司殿、真夜様がお待ちしております」

「わかりました」

荷物を女中に預け零司は葉山の後を追い四葉家当主の四葉真夜の所へ向かった

「真夜様、零司殿をお連れしました。」

「おはいりなさい」

「失礼します」

真夜のいる一室に入るとそこには４０代とは思えないほどの美貌を持つ１人の女性がいた。その女性こそが四葉家現当主であり、零司の母親である四葉真夜である

「司波零司…いや、四葉零司只今帰宅致しました。」

「おかえりなさい、零司さん」

零司は違和感を覚えた。真夜は基本零司のことを「れいくん」と呼ぶのだが真夜から出た言葉は「零司さん」であった。この場合の選択肢は2つ、真夜信者の青木さんが近くにいるか、報告を真剣に聞くかのどちらかである。

「では早速、今回の件での報告を行います」
「よろしくてよ」

そういい真夜は紅茶を啜りながら零司の報告を聞き始める

「今回の反魔法国際政治団体ブランシュ日本支部の殲滅は予定通り、問題なく実行され無力化に成功しました。

今回の詳細は知っていると思われますが念の為に…今回、ブランシュ日本支部のリーダー、司一は義弟である司甲を使い第一高校に潜入、司波達也のキャストジャミングを応用した魔法を見た司甲は壬生紗耶香を使い剣道部に勧誘するが失敗。

その後エガリテは放送室を占拠し、討論会が行われました、が十師族七草家のご令嬢七草真由美の独壇場になり終わると同時にブランシュによる学校への武力行使を開始、これは生徒と教師による制圧で怪我人は出たものの死人は出ませんでした。

その後ブランシュのアジトへ向かい殲滅、司一を無力化し今回の件に終止符を打ちました。」
「成程、だいたいは把握しました。次に達也さんの件について…」
「はい、司波達也は今のところ四葉家を裏切る気配は見られません、ですがいつ裏切るか分からないため今のところ経過報告でしかありませんが。司波深雪は四葉家に戻ることを躊躇う節が見られます」
「ところで零司さん、本家への報告はしないと達也さんに言ったそうだけど」
「よく覚えていますね、そんなものはブラフ、つまり嘘ですよ」
「あらあら、人が悪いですね」
「今更ですよ、母上」

零司も真夜も不敵に微笑む。その光景を見た葉山は娘と孫を見ている感覚になった

「そうですね、とりあえず達也さんと深雪さんに裏切る気配は今のところ無い、それで構いません。最後に次期当主についてなのですが」
「そうですね、今のところ俺が次期当主になる方向で構わないのですがそれだと司波達也の手綱を握りきれないのは確かです。司波達也を当主にすると四葉家の反感を買う

可能性は大いにあります。」
「そうですわね、青木さん辺りは特に気にしそうですしね」
「そのため今のところ俺が考えてる案は司波達也を次期当主補佐にする方がいいかと、あの力と頭脳は四葉家には必要不可欠です。」
「そうね、その通りだわ…葉山さん」
「はい、貰った情報はとても有効なものでした」
「これぐらいなら四葉の情報網で直ぐに取れるでしょ」
「いえいえ、いくら四葉でも達也殿の視界入る危険性があるので最近は零司殿の情報が頼りなのですよ」
「葉山さんに頼りにされるとは嬉しい限りですね」
「ほっほっほ、嬉しいお言葉この老体に染みます」
「大袈裟ですね」
「葉山さん…もういいかしらそろそろ限界だわ」
「ええご存分に母子のお時間を」

葉山がそう言うと真夜は零司に飛びついて来た

「れいく～ん！」
「よく我慢できたね母さん、今日1日はここに居るからね」
「ところでれいくんの本性を1片でも見た千葉のお嬢さんはどうする？消しとく？」
「物騒ですよ、それにエリカはクラスメイトです、俺の本性を知っただけで四葉の関係者、ましてや当主の息子なんて思いもしないよ、大丈夫、仲直りするから」
「そう、れいくんがそう言うならそれでいいわ」

今日1日はずっと真夜と一緒にいた、さすがにお風呂は離れたが夜は一緒に眠った。

零司が本家に到着した頃、桐原と壬生はエリカに連れられある所に来ていた

「おい、千葉ここは」
「ええ、そうよ…ブランシュのアジトがあった廃工場」
「エリちゃん、入っていいの？立ち入り禁止って書かれてるけど」
「あーそれは大丈夫、うちの知り合いに警察関係の人間がいるからこれくらいなんともないわよ」

そういい3人は廃工場に入っていた

「おい千葉、今更なんでこんな所に来たんだ?」
「桐原先輩、不思議に思わなかった?救急車で運ばれたいったテロリストの人数に」
「あぁ、確かに救急車で搬送された人数を見たがアジトにしては敵の数が少ないとは思ったな」

そんなことを、話しているとエリカが目指していた目的地に着いた

「広い場所に着いたね」
「ここがなんだって言うんだ?」

エリカは壬生と桐原にここであった事の顛末を果たし始めた。それを聞いた壬生は手で口を隠し驚きを顕にした

「なんだ?千葉、お前司波弟のことが気になるのか?」
「そ!そんなんじゃないわよ!」

「エリちゃん…」
「だから違うって！」

場所に似つかわしくない雰囲気になるが直ぐに無くなる

「授業中、たまに零司君と目が合うとあの時の光景がフラッシュバックしてどうしても避けちゃうんだ…」
「まぁそんなことをしたやつが目の前にいれば俺でも避けてしまうわな。でもよ、来たところで証拠は無いんだここに居るだけ無駄じゃねぇか？」
「それもそうね」
「まぁ考えても仕方ないよ、大丈夫仲直りできるよきっと」
「喧嘩してるつもりは無いんだけど…まぁそうなればいいかな」
「それじゃ、帰りましょ？エリちゃんの好きな人も分かったことだし」
「だからそんなんじゃないって！」

顔を真っ赤にしながら廃工場から出てきたエリカと笑いながら出てきた壬生と桐原はそれぞれの家に帰宅したのだった

〈To Be Continued〉

九校戦編
九校戦編Ⅰ

数日後、達也が指導室に呼ばれたと聞いて、深雪以外のメンバーが達也を向かえに指導室まで向かった。一科生と二科生が一緒に行動しているので元々目立っているのだが、それ以外の理由でもこのメンバーは目立っているのだ。

エリカ、ほのかは深雪と並び誰もが美少女と認めるだろうし、雫も十分美少女のラインだし、美月はその大人しい性格から先輩たちからの人気が高い。そしてレオも彫りの深い顔立ちと日本人離れした顔立ちでそれなりに人気があるのだ。このメンバーがゾロゾロと歩いていれば、やはり相当目立つのだ。

それでもまだ、絶世の美少女と評される深雪と、色々と有名人な達也が居ない分騒がしくはなって無いのだが……

「「失礼します」」

指導室から出てきた達也達を見つけて、一斉に達也の許に駆け出す6人、それを気配

で感じ達也は振り向きざまに呆れた声を出した。

「如何したんだ皆、そんな大勢で……」

「如何したはこっちのセリフだぜ達也。指導室に呼び出されるなんて何があったんだよ」

「実技試験の事で尋問を受けていた」

「尋問？　随分と穏やかじゃないわね」

「それで、如何して達也さん達が尋問されなきゃいけなかったんです？」

「簡単に言えば、手を抜いたんじゃないかと疑われた」

「俺はそれと同時に据え置きのＣＡＤを凹ませたことについてのお小言も」

一高では試験成績優秀者を学内ネットで発表するのだが、総合成績は深雪、ほのか、雫が上位を占め、実技の成績でも深雪、雫、ほのかが上位を独占した。だが理論になるとちょっと様子が違ったのだ。

一位はこのメンバーの予想通り達也と零司だったのだが、その点数が驚きだった。全教科満点のぶっちぎりトップ、二位の深雪と平均点で１０点以上の差をつけての一位だったのだ。

「理論には一科生と二科生の差が無いとは言え、トップ3に二科生が三人も入ってるのは教師陣も驚きだったようだな」

深雪の下、三位には二科生で達也たちのクラスメイトの吉田幹比古と言う男子がランクインしている。ちなみにほのかが四位、雫が八位、美月が十二位でエリカが十七位、エイミィが二十位とメンバーでレオ以外が上位二十位に名を連ねているのだ。

「おっ、漸く見つけた」
「委員長？　何か御用でしょうか？」
「頼みたい事があってな、試験前ということもあり、なかなか言い出せなかったんだ」
「なにをすれば？」
「実は風紀委員の引き継ぎの資料を作らなくちゃいけないんだが…知っての通り、私はそういう事が苦手でな」
「いいですよ。今からですか？」
「あぁ、夏休み入る前には終わらせたいからな。それじゃあ達也君と雫司君を借りてくぞ」

「悪いな、また明日」
「また明日～」

摩利に引っ張られてくように連れて行かれる

風紀委員会本部に連れて来られた達也達は、委員長引継ぎの為の資料を作らされていた。

「すまないな。君達が居なければ我々はまた同じ轍を踏むところだった」
「苦手なのは仕方ないですが、丸投げは止めてほしいですね」
「いや～それにしても君達が居てくれて助かった」
「こっちは終わりましたよ」
「こっちも終了しました」
「ありがとう、いつも感謝してるよ」
「いえいえ、これくらいお易い御用ですよ」
「自分は余り仕事を増やしてもらいたくはないですね」
「ぜ、善処しよう」

そういい達也と零司は風紀委員室をあとにする。その日の夜、達也と深雪は九重の寺でミラージュバットの練習をするといい家を出た。

「さてと、兄さん達が帰ってくる前に例のＣＡＤを完成させようかな」

そういい零司はまた地下室にこもる。数時間後達也達が帰ってきたと同時にプログラムが完成した。その後帰ってきた達也達から小野遥が公安のオペレーターだと知る

試験が済んだからと言って、授業が無くなる訳では無い。そして魔法科高校にも体育と言うものは存在しており、１―Ｅは現在体育中だ。

「オラオラ！　退きやがれ!!」

コートを所狭しと駆け巡るレオ、レッグボールと言われるフットサルから派生した競技が今日の内容だ。

「達也！」

まともに受ければ昏倒するほどの勢いでパスを出したレオ、達也はそれを上に蹴り上げて跳ね返ってきたところを踏みつける。そして味方の一人の動きを確認して壁に向けてパスを出す。思いがけない動きに敵は反応出来なかったが、パスを出した相手はしっかりとその動きを読んでいて、冷静にシュートを放った。

「へぇ、アイツなかなかやるな」
「動きも良いし読みも悪く無い」

一学期も終わりに差し掛かっており、達也もレオもクラスメイトの顔と名前くらいは把握している。だが二人共その相手とは話した事が無かった。
試合が終わり、休憩中に達也とレオは例の相手との接触を図った。

「ナイスプレー」
「意外とやるじゃねぇか、吉田」
「幹比古だ。苗字で呼ばれるのは好きじゃ無い」

名門吉田家の直系が、苗字で呼ばれるのを嫌うのに、達也は何となくの心当たりがあった。

「おう、分かった。それじゃあ俺の事もレオで良いぜ」
「司波零司だ、零司でいいよ」
「俺も幹比古と呼ばせてもらって良いか？　その代わり俺の事も達也で良い」
「オーケー達也。実を言うと君とは話してみたかったんだ」
「実は俺もだ」

理論分野で一位と三位、お互いが意識していても何もおかしく無いのだが、幹比古は達也が自分の何処を気にして話してみたかったのか不思議に思っていた。

「何だか疎外感だな……」
「レオとも零司とも話してみたかったよ。何せあのエリカとまともに付き合えるんだからね」
「何か釈然としねぇな……」

「同意」
「幹比古はエリカと前からの知り合いなのか？」

何気無い質問だったのだが、幹比古が顔を顰めたのを見て質問を取りやめるつもりだった。だが横からの割り込みで達也の心遣いは不発に終わる。

「所謂幼馴染ってやつ？」
「エリカちゃん、何で疑問系なの？」
「知り合ったのが十歳の時だからね。幼馴染って呼べるか微妙なところだし、最近は避けられてるからね。ねぇ、達也君は如何思う？」
「幼馴染で良いんじゃないのか」

いきなり現れてマイペースに物事を進めるエリカに、達也は呆れながらも答える。一方のレオと幹比古は、エリカの格好を見て固まってしまっていた。

「え、エリカ、何て格好をしてるんだ!?」
「何って、伝統的な女子用体操服だけど？」

エリカの剥き出しの太ももを見て顔を真っ赤にしている幹比古に、エリカは気にした様子も無く答える。

「伝統!?　そんなのが伝統だと言うのかい!?」

「そんなに変か？　変ったデザインのスパッツだとは思うが」

焦る幹比古を他所に、達也は普段通り淡々と話している。その態度にエリカも安心して話を続けられるのだ。

「スパッツじゃないわよ」

「でもアンダースコートって訳じゃないだろ」

「あのね達也君、いくらアタシだってスコート無しでアンダースコートは穿かないわよ。これはねブルマーって言うのよ」

「ブルマー？　箒みたいな名前だな。昔はそんな格好で掃除してたのか？」

達也のボケとも取れる発言にエリカは興奮したように答える。

「そんな訳無いじゃん！　てか、女子用体操服だって言ったじゃん！」

エリカが怒鳴ったおかげか如何かは分からないが、此処でレオが現実に復帰した。

「ブルマーって言うとあれか、昔のモラル崩壊時代に女子中高生が小遣いほしさに親父共に売っていたと言う……」

だが復帰しなかった方が彼の為だったかもしれな。

「黙れバカ!!」

魔法科高校にとって九校戦とは、秋の論文コンペティションに並ぶ一大イベントだ。

華やかさでは圧倒的に九校戦の方がある。スポーツタイプの魔法競技で争われる対抗戦で各校クラブのレギュラーを揃えてくる。

「かと言って全部のクラブを平等に扱うのは難しいのよね……」

「得て不得手があるからな。そこら辺は選手も分かってるだろ」

生徒会室で頭を抱えながらぼやく真由美に、摩利が慰めの言葉を掛ける。

「選手の方は十文字君が手伝ってくれたおかげで何とかなったのだけど、問題はエンジニアよ」

「何だ、まだ揃ってないのか？」

「二年生はあーちゃんとか五十里君とか、優秀な人材が揃ってるのだけれどもね」

話題に上がったあずさは小さく拳を握った。彼女もエンジニアとしての自信は相当あるようだ。

「五十里か……アイツも専門は幾何の方だろ？　調整はそんなに得意じゃ無いと聞いて

いたが」

摩利が不思議そうに首を傾げていると、真由美は更に深く頭を抱えてつぶやくように言う。

「せめて摩利が自分のＣＡＤくらい自分で調整出来れば良いのだけれど……」

あてつけのように視線を摩利の方に向ける真由美。摩利はその視線を受け気まずそうに視線を逸らした。

「深刻な問題だな……」

「ねえリンちゃん。やっぱりエンジニアやってくれない？」

再三要請しているのだが、市原は首を縦には振らなかった。

「無理ですね。私の腕では中条さんたちの足を引っ張るだけです」

机に突っ伏した真由美を見て、達也はアイコンタクトで零司に合図を出した。このまま生徒会室に居ると自分に都合の悪い展開になると分かっていたからだ。そして腰を浮かしかけたところで、達也の勘は的中した。

「だったら司波君に頼むのは如何でしょう？司波さんのＣＡＤは司波君が調整しているようですし」

「……そうよ！　盲点だったわ！」

あずさの言葉が徐々に浸透したのか、ゆっくりと立ち上がったのに言葉の勢いはもの凄いものだった。

「そうか、私としたことがうっかりしていた」

真由美は羨望の眼差しを達也に向ける。その光景に我関せずの零司は楽しそうに眺めていた

「1年生が技術スタッフになった例は過去にないのでは？」

「なんでも最初は初めてよ」
「前例は覆すためにあるんだ」

進歩的な2人を前に達也もさすがに諦められない

「進歩的なお二人はそうお考えかもしれませんが、1年生の…それも二科生。しかも俺は色々と悪目立ちしていますし」

4月のブランシュの件も然り、最近では二科生にしては筆記は満点。これを悪目立ち以外なんと言おう

「CADの調整はユーザーとの信頼関係が重要です。選手の反発を買うような人選はどうかと思いますが」

屁理屈をこねたところで、結局は面倒事を引き受けたくない達也の心情を理解してる二人は、如何やって攻撃（口撃）して引導を渡そうかをアイコンタクトで話し合っていた。だが二人の計画は第三者の所為で（おかげで?）必要無くなった。

「私は九校戦でもお兄様にＣＡＤを調整して頂きたいのですが……ダメでしょうか？」

深雪のお願い（上目遣いと涙目でのだ）に達也はガックリと肩を落とした。まさか自分の妹が止めを刺しに来るとは思って無かったのだ。

「そうよね！信頼出来るエンジニアがいると心強いわよね、深雪さん！」

「はい！」

深雪は嬉しそうに返事をする

「じゃあ、放課後に準備会議があるから…そこで相談しましょ？」

もはやエンジニアの参加は決定だと思い達也は大きく肩を落とす。

「兄さんがんばって」

「何を言っているんだ、キミも参加するに決まっているだろう？」

「冗談ですよね？」
「本気だ」
「いや、今の流れは兄さんがエンジニアに抜擢、これで人員不足は解決、万々歳。ってオチですよね？」
「ん？そんなことは言ってないし、それに人員は多いに越したことはないだろ？」
「会長～～…」
「私は零司君の技術力を見てみたいな～なんて…」
「はぁ…」

肩を落として思いっきり落ち込んでしまう

「零司、諦めろこうなった時の２人はもうとめられん」

零司は達也のその言葉の裏には「お前も道連れだ」としか聞えなかった
「どうなっても知りませんからね」
「望むところだ」

〈to be continued〉

九校戦編…Ⅱ

「生徒会は技術スタッフとして1年E組の司波達也君を…」
「そして風紀委員は同じく1年E組の司波零司君を推薦する」

周りの人達は受け入れる所か反発する言葉が多かった

「達也さんの実力も知らないくせに」
「うん、私も達也さんに担当してもらいたいな」

その言葉が聞こえたのか聞こえなかったのかは置いておいて零司はいつかのように居心地の悪さに滅入っていた

「(ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛帰りてぇ〜、んだよ兄さんだけでいいだろ、かの有名なミスターシルバーが九校戦のエンジニアになるんだからそれだけで優勝確実じゃん!なん

で俺まで！）」

そんなことを考えてるとも知らない周りの人達はどんどん会話が進んでいく

「納得が行かない者が居るようだが、司波の技能を実際確かめてみるのが一番だろう」

「具体的にはどうする」

「実際にＣＡＤの調整をやらせてみればいい…なんなら俺が実験台になるが」

克人の言葉に１人の生徒が危険だといいやらせるのを拒んだ

「では、彼らを推薦したのは私ですからその役目は私がやります。」

「いえ、その役目俺にやらせてください」

そこに立ち上がったのは桐原だった。

達也達は学校にあるＣＡＤ調整室に来ていた。

「課題は競技用ＣＡＤに桐原先輩のＣＡＤの設定をコピーして、即時使用可能な状態にする。ただし起動式そのものには手を加えない…で間違いありませんか？」

「ええ、それでお願い」

確認した達也に、真由美が笑顔で頷いた。しかし達也は首を縦にでは無く横に振った。

「如何かしたの？」

「スペックの違うＣＡＤの設定をコピーするのは、あまりお勧め出来ないんですが……仕方ありませんね。安全第一で行きましょう」

「？」

真由美をはじめ、複数人が首を傾げた。普段からＣＡＤの設定のコピーをしているので、何故達也が渋っているのかが分からなかったのだろう。

しかしエンジニアとしてこの場に参加しているメンバーは頷いたり面白そうな表情

を浮かべたりと反応は様々だった。

「それじゃあ桐原先輩、測定しますので手を置いて下さい」

「分かった」

桐原のＣＡＤのデータを半自動的に抜き出し、競技用ＣＡＤにコピーする……のではなく、達也は調整機に作業領域を作りそこに保存した。普通とは違う手順に今度はエンジニアのメンバーが首を傾げた。

想子を計測して自動的にＣＡＤにそのデータが組み込まれて普通は終わりなのだが、此処からがエンジニアの腕の見せ所。自動調整に頼らずに精密な調整を行うのだ。

「ありがとうございます。もう外してもらって結構ですよ」

桐原の想子波特性の計測が終わり、後は微調整を施せば終わりなのだが、何時まで経っても達也は作業を始めようとしない。測定結果が表示されているモニターをジッと見ている。

周りで作業手順を忘れたのかとささやかれていたが、あずさにはそうは見えなかった。オロオロとしてるのではなく、怖いくらいに一点を見つめているのだ。

そしてついに好奇心を抑えられなくなり、達也の肩口からひょっこりとモニターを覗き込んで……

「へっ!?」

乙女には似つかわしくない声を出したのだった。そしてあずさの反応が気になったのか、真由美と摩利、克人に鈴音、桐原も背後からモニターを覗き込んで息をのんだ。

普通計測結果はグラフ化されて表示されるのに、今モニターに表示されてるのは画面いっぱいに流れていく数字だったのだ。

それが分かるのは、あずさがエンジニアとして優れた才能を有しているからなのだが、それ以外の人間は今時珍しいキーボードオンリーの調整方法とその速度に目を奪われていた。

「終わりました」

達也に手渡されたＣＡＤを桐原が起動し、感触を確かめる。

「如何だ桐原」

「全く違和感が無いですね。何時も使ってるのと同じみたいです」

「確かに腕はあるようですけど、同じ結果なら我々にだって出来ますよ」

頑として達也の実力を認めたくない人たちは、調整完了時間が普通だとか、珍しかったけど特筆すべき事は無いだとかあれこれ難癖をつけてきた。

「私は司波君のチーム入りを強く支持します。彼が見せてくれた技術はとても高度なものです。全てマニュアルで調整するなんて私には真似できません！」

「桐原個人のＣＡＤは競技用のものよりハイスペックな機種です。使用者にその違いを感じさせなかった技術は高く評価されるべきだと思いますが？会長、私は司波のエンジニアチーム入りに支持します」

「はんぞーくん？」

真由美は今まで二科生だと蔑んでいた服部が達也を支持したことに驚いた

「九校戦は当校の威信をかけた大会です。１年生だとか、前例がないとかそんなことにこだわっている場合ではありません」

「服部の指摘は最もの物だと俺も思う。司波は我が校の代表メンバーに相応しい技量を

示してくれた。俺も司波のチーム入りを支持する」

そうして達也の九校戦メンバーに選ばれた

「さて、次は零司君の番だな」
「やっぱりやらなきゃダメですか？」
「頑張って♪」

メンバー入りが決まった達也は零司に耳打ちする

「零司、手を抜いたら許さないからな」
「怖いですお兄様…はぁ仕方ない、服部先輩、手を加えてない競技用ＣＡＤをひとつ貸してくれませんか？」
「これでいいか？」
「ありがとうございます。では始めましょう」

そういいまず零司は手を加えていないＣＡＤのプログラムを一通り見てから桐原の

ＣＡＤをコピーした競技用ＣＡＤに手を加え始める。零司も達也同様、完全マニュアル調整で行っている。
「終わりました。」
「なぁ司波弟、何やってたんだ？」

桐原はみんなが思っていることを代弁して喋った

「では解説を交えながら何をやっていたのか皆さんに説明しましょう。まずこっちが服部先輩から頂いた手を加えていない競技用ＣＡＤです。もう１つは兄さんがやった桐原先輩のＣＡＤをコピーした競技用ＣＡＤです。」

みんな興味深そうに解説に聞き入る

「まず俺は手を加えていないＣＡＤのグラフとプログラムを一通り見てからコピーした競技用ＣＡＤを一度削除し、プログラムを一から組み直しました。」

その行動に周りが騒ぎ出す

「ではこちらをご覧下さい。左が手を加えていないＣＡＤの、右が一度削除し組み直したＣＡＤのグラフとプログラムです。」
　そこに出たのはグラフの違いはどちらとも変わらないが右のプログラムは文字数列が圧倒的に少ない

「あの、一つ質問いいですか？」
「なんですか？中条先輩」
「何故左のプログラムは右のプログラムより文字数列が少ないんですか？」
「標準の競技用ＣＡＤにあった無駄なゴミを綺麗してから左のＣＡＤに打ち込んだだけですよ」
「そんなことが…」

　周りは高等な技術をさも平然とやってのける零司に圧倒されていた。そのまま零司も九校戦メンバーに選ばれた。

「あれ？ねえ兄さん、俺別に難しいことしてないよね？なんでメンバー入りするんだ？」

「さぁ？」

周りの普通と達也達の普通がズレていることを彼らは知らない

食事を終え、深雪が片付けをしている時に端末に通信を知らせる合図が来た。相手は非通知だが、司波家にとってこれは別に珍しい事では無い。

「お久しぶりです。……狙ったのですか？」

「お久しぶりです、風間少佐」

『何の事だか分からないが……久しぶりだな、特尉。そして四葉殿』

画面に映ったのは不得要領な顔をした旧知の顔だった。

「その呼び方をすると言うことは秘匿回線ですか……よくもまぁ毎回一般家庭用のラインに割り込めるものですね」

『簡単では無かったがな。特に特尉の家のセキュリティーは一般家庭のわりには厳重過ぎるからね』
「最近のハッカーは見境無いですからね。それにあまり深くまで侵入しようとしなければカウンタークラックは発動しませんよ」
『新米オペレーターには良い薬になったようだ。さて、まずは事務連絡だが、本日『サード・アイ』のオーバーホールを行い、部品をいくつか新調した。これに合わせてソフトウェアのアップデートと性能テストを行って欲しい。』
　通信の相手、陸軍一〇一旅団・独立魔装大隊隊長、風間玄信少佐は端的に用件を伝えてきた。
「分かりました、明朝出頭します」
『いや、学校を休むほど差し迫った用件では無いのだが……』
「いえ、次の休みには零司と共に研究所の方で新型デバイスのテストがありますので」
『本官が言えた事では無いが、二人とも高校生になってますます学生らしくない生活になってるな』
「この言葉は好きじゃ無いですが、仕方ない事です」

　達也の諦めにも似た言葉に、風間少佐も頷きそれ以上のツッコミは無かった。

『では次の話だが、聞くところによると特尉、今夏の九校戦には二人とも参加するようじゃないか』
「……はい」
「お耳が早いですね、少佐」

　達也達が九校戦に参加する事が決定したのは数時間前なのだが、その事をもう風間が知っている事に達也は誰が伝えたのか気になったが、聞いても答えてくれないと分かっているので好奇心を捻じ伏せた。
『会場は富士演習場南東エリア。これは例年の事だが……気をつけろよ、達也それと零司殿も』

　呼び方が「特尉」から「達也」と「四葉」から「零司」に代わった事で、この話は風間少佐としてでは無く達也と零司の一友人の風間玄信としての進言だと即座に理解した。

『該当エリアに不穏な動きが確認されている。それに国際犯罪シンジケートの構成員ら

しき姿も確認されている。非常に嘆かわしい事だ』
「国際犯罪シンジケートと仰いましたが、もしかして無頭竜ですか？」
『……よく知っているな。内情の壬生に調べさせて漸く分かったのに』
「壬生さんと言うと、第一高校所属、壬生紗耶香の御父君ですよね」
『面識があるようだな。それで達也、何故無頭竜の事を？』
「ブランシュ討伐後、本家に帰宅した際に母上から聞きました。」
『なるほど、四葉殿なら我々より先に情報を入手していてもおかしくは無いな』
「ですが、詳しい情報は一切ありませんので、少佐の情報は非常に役に立ちます」
「こちらもなにか情報が入ればすぐにでも」
『そうか、壬生に調べさせた甲斐があったと言うものだ。明日は無理だが富士では会えるかもしれないな』
「楽しみにしてます」
『私も楽しみだ……おっと、少し長く話しすぎたようだ。新米が焦ってるからそろそろ切るぞ』

如何やらネットワーク警察に回線割り込みの尻尾を掴まれたようだ。
通話を切った後の達也は少し息を吐き地下室に向かった

〈To Be Continued〉

九校戦編：Ⅲ

地下室に向かった達也のために紅茶を入れて向かおうとしていた深雪を引き止めた

「深雪、兄さんの所に行くんだろ？ミラージュバットのコスチュームを着ていくといい」

「さすが零司お兄様！名案ですわ！」

深雪は急いでミラージュバットのコスチュームを着て達也のところに行く。その光景を見てコーヒーを飲みながら呟く

「兄さんから聞いてたけどそろそろ飛行術式のデバイスが完成する頃だろう…さてと」

俺はある場所へ連絡を入れる

「もしもし、葉山さんですか？」

『おや、零司殿ではありませんか？最近よく電話を頂きますね』

「すみません、こちらも情報だけでも持っておきたいと思いまして…母上は？」
『真夜様はお眠りになられました。起こしてきましょうか？』
「いえ、大丈夫です。」
『かしこまりました。では用件と言うのは？』
　本題に入る
「はい、まず先程風間少佐からの連絡が入り、今回の九校戦には無頭竜が干渉すると聞き、詳しい情報が欲しかったため連絡を入れた次第であります。」
『そうですか、申し訳ありませんがこちらが得ている情報はあまり詳しくはありませんが、今回の九校戦、無頭竜の標的は第一高校の生徒…だけとしか』
「そうですか、お手数をおかけします。それだけでも充分です、そろそろ兄さん達が戻ってきそうなのでここら辺で」
『そうですか、では九校戦は真夜様とご拝見させて貰います』
「エンジニアですが、ありがとうございました葉山さん。」

　葉山との電話を切ると直ぐに達也が深雪と共に地下室から上がってきた
「誰と電話をしていたんだ？」
「知り合い」

嘘はついていないが葉山さんの名を出すのはやめておこうと考えた

後日フォア・リーブス・テクノロジー、略称ＦＬＴのＣＡＤ開発センターは達也たちの住まいから交通機関を乗り換えて二時間の辺鄙な場所にある。実は電動二輪を使えば半分の時間で着くのだが、生憎天気が悪い為二人乗りは避けたのだ。通いなれている達也だが、逆に言えば通いなれているからこそ、長距離の移動は面倒でしか無いのだ。

「あっ、御曹司！」

研究施設の中の一室に達也と零司、深雪が入室すると、それに気付いた研究員が群がってくる。非常に珍しい事だが、此処では深雪では無く達也が歓迎されるのだ。

御曹司と言う呼び方も、初めは重役の息子だからと言う嫌味で使われていた言葉なのだが、何時しか次期リーダーを期待しての呼び方に変っていた。皆が好意でそう呼んでくれているのを達也も分かっているので、迂闊に「やめてくれ」とは言えない状態になってしまっているのである。

「お邪魔します。牛山主任はどちらに？」

深雪が自分が褒められている時以上に喜んで、上機嫌の微笑を振りまいて研究員たち

の余所見を誘発してるのに若干呆れながらも、達也は目的の人物の所在を初めに話しかけてきた研究員に尋ねた。

「お呼びですかい、ミスター」
「スミマセン主任、お忙しいところに」
「ダメダメ！　此処に居る私たち全員はアンタの手下だ。手下に謙りすぎちゃ示しが付きませんぜ」
「皆さんは親父に雇われてるのであって、俺の部下と言う訳では……」
「何を仰る。天下のミスター・シルバーともあろうお方が。俺たちはアンタの下で働けるのを光栄に思ってますよ」
「それを言うなら、名実共に此処のトップはミスター・トーラス、貴方じゃないですか」

ＦＬＴ　ＣＡＤ開発第三課、此処は世に言う「シルバーモデル」の開発部署だ。そして一切の情報が非公開の謎の天才技術者の正体を知っている人間が揃っている場所でもある。
「やめて下さいよ。俺は「ミスター」や「トーラス」なんて柄じゃねぇんです、それに俺はもうトーラスじゃねぇですよ、２代目トーラスは御曹司の隣にいる弟さんじゃねぇで

すかい。アンタ達の天才的なアイディアを実現する為に、ほんのちょっと手伝っただけなんですから。御曹司が未成年って事で単独の開発権利者だとマズイって事で仕方なく名前を連ねてるだけでさぁ」

「牛山さんの技術力がなきゃループ・キャストは実現しませんでしたよ。俺にはあの考え方は出来ませんでしたからね。牛山さんに比べれば俺にはハードの知識も技術も劣ってますし、製品化出来なければ技術も理論も役に立ちませんよ」

達也の謙遜とも取れる言葉に、牛山さんはむず痒そうに頭を掻いて降参を示した。

「止め止め！　如何やっても口では御曹司には勝てねぇ。それで、今日は何しに来たんです？　まさか俺たちの顔を見に来たってこたぁ無いでしょ？」

第三課で働く研究員の殆どが男性。同姓の達也が好んでくるような場所では無い事は牛山も分かっている。しかし数人居る女性研究員は達也の事を尊敬以上の感情の篭った目で見ている事も知っている。

「オーケー牛山さん、今日はこれです」

もちろん達也も女性研究員の視線には気付いているのだが、その事を話題にしようとはしない。

「これはもしや……飛行術式ですかい？」
「牛山さんが改良してくれたおかげで、簡単にシステムの書き換えが出来ましたよ」
　元々は達也が組み立てた試作用ハードを牛山がより高度に改良したものが、牛山に渡された意味を、達也を手伝っている第三課の全員が理解した。
「それで、テストは……」
「何時ものように俺と深雪で。ですが俺たちは普通の魔法師とは言えませんから」
　息を呑む音が部屋中から聞こえた。それだけ三大難問の一つが覆されたと言う事実は大きな意味を持つのだ。
「おいテツ、Ｔ－７型の手持ちは幾つだ？」
「十機です」
「馬鹿野郎！何で補充しとかねぇんだよ！部品の発注なんて後回しだ！あるだけ全部に御曹司のシステムをフルコピーしろ！ヒロ、テスターを全員呼べ！何？休みだぁ？そん

なの関係ねぇ！すぐに呼び寄せろ！分かってんのか？飛行術式だぞ！現代魔法の歴史が変るんだ！」

急に慌しくなった研究室でただ一人、深雪だけが変らぬ笑顔で佇んでいた。

テスターによるテストは予定時間を大幅に越えて行われた。実験が上手く行かなかった訳では無い。九人のテスターが希望して有線ケーブルから無線に切り替え、更には空中鬼ごっこを始めてしまったのだ。

「お前ら全員阿呆だろ。常駐型魔法がそんな長時間使える訳ないだろ」

魔法力が尽きるまでテストを続けたのだが、幸いにして後遺症が残るような事態にはならなかったのだ。

「馬鹿やったツケは自分で払えよ。超勤手当てなんて出さねぇからな」

テスターからブゥブゥと文句が垂れているのを完全無視して、牛山は達也に話しかけた。

「何か気になる事でもあるんですかい？」

達也の表情から、牛山は達也が結果に満足してない事に気がついた。

「欲を言えばきりが無いのですが、今のままでは負担が大きすぎますね」
「そりゃ、普通の魔法師の保有する想子なんぞ、御曹司やお嬢様と比べれば微々たるものですからね」
「ＣＡＤの想子自動吸引スキームをもっと効率化しなくては……」
「兄さん、ならソフトじゃ無くハードで処理すれば少しは負担も減るんじゃないかな？。タイムレコーダーも専用回路をつけた方がいい」
「さすが２代目トーラスだな」

零司は照れくさそうに頭を掻き、テストが終了した。第三課を出た廊下で２人の男性と鉢合わせた。

それは達也と深雪の父親である司波龍郎と四葉家内序列４位の青木だった

「これは深雪お嬢様、ご無沙汰致しております。零司様もお変わりないご様子で」

「お久しぶりです青木さん、お父様もお元気そうで」
「お久しぶりです青木さん」

深雪は棘がある言い方で、俺はあえて青木さんと同じやり口で返答する。

「青木さん、ここにいらっしゃるのは私と零司お兄様だけではありませんが」

深雪は達也にも挨拶をしろと言いたそうな話し方をするが

「お言葉ですがお嬢様、この青木は四葉家の執事でございますれば、一介のボディーガードに例を示せと仰せられましても秩序というものがございます。」

「私の兄ですよ?」

深雪は苛立ち始める

「恐れながら、深雪お嬢様は四葉家次期当主の座を家中の皆より望まれているお方。お嬢様の護衛役に過ぎぬそこの者とは立場が違います」

深雪の怒りが爆発する前に達也が止めに入る

「おや、青木さん…口を挟んで失礼かと存じますが随分穏やかならぬことを仰る。今のご発言は他の次期当主候補の皆様、ましてや現当主のご子息である零司に対して余りにも不穏等ではありませんか？それとも叔母上は後継者を指名なされたのでしょうか」

正直母さんは俺以外を当主にするつもりはないのだが、あえて何も言わずにこのやり取りを見ていた

「（青木さんも良くもまぁ当主の息子である俺がここにいることを知りながら、深雪に当主にさせたがるよね）」

そんなことを考えてはいるが口にはしない

「真夜様はまだ何も仰せになられてはいない」

「これは驚いた！四葉家で序列第４位の執事である貴方が次期当主候補者である深雪に憶測を吹き込んだという訳ですか…さて、秩序を乱しているのはどなたなのやら…」

達也の正論に青木は苦虫を噛み潰したような表情をする

「憶測ではない、心同じくする者同士思いは通じる！心を持たぬ似非魔法師如きに分かりはしないだろうが」

青木は――彼は、深雪の前で言ってはならない事を言った。青木の発言を聞いてすぐに、辺りから何かが軋むような音が聞こえてくる。急激に下がった気温を元に戻そうと空調が最大で起動しているにも関わらず、気温低下は抑えられない。

だが、軋むような音と共に気温の低下は収まった。達也が左手が指差すと壁に張り付いていた霜や、深雪の周りに渦巻いていた冷気が消えた。

蒼白になった妹を片手で抱き寄せ、斬りつけるような視線を青木に向けた。

「その心を持たぬ似非魔法師を作ったのは、俺の母親にして四葉家現当主四葉真夜の姉である司波深夜…旧姓四葉深夜ですが。俺を似非呼ばわりするという事は四葉家当主とその姉を誹謗しているということになるんですが」

「達也、やめなさい。お母さんを悪くいうものでは無い。お前が母さんを恨む気持ちも分からないではないが」

「親父、それは勘違いだ。俺は母さんを恨んでなんていない。行こう深雪、零司」

「分かったよ兄さん…」

零司は龍郎を通り過ぎる瞬間、龍郎に話しかけられる

「ところで零司君、何故君が司波の性を名乗るんだね」
「あなたが知る必要はありません。サイオン保有量だけが取り柄の種馬が」
「なっ!!」
「零司、置いていくぞ」
「待ってよ兄さん!!」
俺達はＦＬＴを後にする。

月曜、達也と零司が教室に入るなり、クラスメイトから「おめでとう」と言われた。一瞬何の事か理解出来なかった達也と零司だったが、すぐにエンジニアとして九校戦メンバーに選ばれた事だと理解した。

「みんな情報が早いな……」
「ホントですね。ついこの間決まったばかりなのに」
「そう言えば、今日の発足式が正式発表じゃなかったっけ？」

美月もエリカも達也が選ばれた事を誰かから聞いたようで、如何やら彼女たちが率先して噂を流してる訳では無さそうだった。恐らく部活の先輩に聞いたのだろうと、俺たちはエリカの質問に冴えない表情で頷いた。
「確か5限目でしたね達也さん達も出るんですよね？」
「うん、まぁ……」

歯切れの悪い返事をした

「一年じゃ達也と零司だけなんだろ？」
「一科の連中、かなり悔しがってるみたいよ～」
「選手の方は一科だけなんだかなぁ」
「仕方ないですよね、嫉妬は理屈じゃありませんから」
「大丈夫よ、魔法は飛んでこないから」

そして午後、発足式と言う名のお披露目会が開かれる事となり、達也と零司はエンジニアのユニフォームを着て壇上に並ぶ。真由美に名前を呼ばれ、深雪にバッチをつけてもらったのだが拍手は疎らなものだった。そうして発足式は幕を閉じた

～Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ～